

源氏物語

若菜(下)卷

与謝野晶子訳



源氏物語

若菜（下）

紫式部

與謝野晶子訳

二ごろたれ先^まづもちてさびしくも悲

しき世をば作り初^そめけん
（晶子）

小侍従が書いて来たことは道理に違いないがまた露骨なひどい言葉だとも衛門督^{えもんのかみ}には思われた。しかももう浅薄な女房などの口先だけの言葉で心が慰められるものとは思われないのである。こんな人の中へ

置かずに一言でも直接恋しい方と問答のできることは望めないのであ
ろうかと苦しんでいた。限りない尊敬の念を持っている六条院に穢辱^{おじよく}
を加えるに等しい欲望をこうして衛門督が抱く^{いだ}ようになった。

三月^{やよい}の終わる日には高官も若い殿上役人たちも皆六条院へ参った。

氣不精になつてゐる衛門督はこのことを皆といつしよにするのもおつ
くうなのであつたが、恋しい方のおいでになる所の花でも見れば氣の
慰みになるかもしれぬと思つて出て行つた。賭弓^{かけゆみ}の競技が御所で二月
にありそうでなかつた上に、三月は帝^{みかど}の母后の御忌月^{ぎよきづき}でためであるの
を残念がつてゐる人たちは、六条院で弓の遊びが催されることを聞き
伝えて例のように集まつて來た。左右の大將は院の御養女の婿であ
り、御子息であつたから列席するのがむろんで、そのために左右の近^こ

衛府のえふの中將に競技の参加者が多くなり、小弓という定めであつたが、大弓の巧者な人も来ていたために、呼び出されてそれらの手合わせもあつた。殿上役人でも弓の芸のできる者は皆左右に分かれて勝ちを争いながら夕べに至つた。春が終わる日の霞かすみの下にあわただしく吹く夕風に桜の散りかう庭がだれの心をも引き立てて、大將たちをはじめ、すでに酔っている高官たちが、

「奥のかたがたからお出しになつた懸賞品が皆平凡な品でないのを、技術の専門家にだけ取らせてしまうのはよろしくない。少し純真な下へ手者たものも競争にはいりましょう」

などと言つて庭へ下りた。おこの時にも衛門督えもんのかみがめいつたふうでじつとしているのがその原因を正確ではないにしても想像のできる大將の

目について、困ったことである。不祥事が起こってくるのではないかと不安を感じだし、自分までも一つの物思いのできた気がした。この二人は非常に仲がよいのである。大将のために衛門督が妻の兄であるというばかりでなく、古くからの友情が互いにあつて睦まじい青年たちであるから、一方がなんらかの煩悶はんもんにとらえられているのを、今一人が見てはかわいそうで堪えられがたくなるのである。衛門督自身も院のお顔を見ては恐怖に似たものを感じて、恥ずかしくなり、誤った考えにとらわれていることはわが心ながら許すべきことでない、少しのことにも人を不快にさせ、人から批難を受けることはすまいと決心している自分ではないか、ましてこれほどおそれおおいことはないではないかと心を鞭むちうっている人が、また慰められなくなつて、せめて

あの時に見た猫でも自分は得たい、人間の心の悩みが告げられる相手ではないが、寂しい自分はせめてその猫を馴なつけてそばに置きたいとこんな気持ちになった衛門督は、氣違いじみた熱を持って、どうかしてその猫を盗み出したいと思うのであるが、それすらも困難なことではあつた。

衛門督は妹の女御にょごの所へ行つて話すことで悩ましい心を紛らせようと試みた。貴女きじよらしい慎しみ深さを多く備えた女御は、話し合つてゐる時にも、兄の衛門督に顔を見せるようなことはなかった。同胞きようだいですらわれわれはこうして慣らされているのであるが、思いがけないお顔を外にいる者へ宮のお見せになつたことは不思議なことであると、衛門督えもんもさすがに第三者になつて考えれば肯定できないこととは思われ

るのであるが、熱愛を持つ人に対してはそれを欠点とは見なされない
のである。衛門督は東宮へ伺候して、むろん御兄弟でいらせられるの
であるから似ておいでになるに違いないと思つて、お顔を熱心にお見
上げするのであつたが、東宮ははなやかな愛嬌あいぎようなどはお持ちにならぬ
が、高貴の方だけにある上品に艶えんなお顔をしておいでになつた。帝の
お飼いになる猫の幾疋ひきかの同胞きようだいがあちらこちらに分かれて行つてい
る。一つが東宮の御猫にもなつていて、かわいい姿で歩いているのを見て
も、衛門督には恋しい方の猫が思い出されて、

「六条院の姫宮の御殿におりますのはよい猫でございます。珍しい顔
でして感じがよろしいのでございます。私はちよつと拝見することが
できました」

こんなことを申し上げた。東宮は猫が非常にお好きであらせられるために、くわしくお尋ねになった。

「支那しなの猫でございまして、こちらの産のものとは変わっておりまして。皆同じように思えば同じようなものでございますが、性質の優しい人馴なれた猫と申すものはよろしいものでございます」

こんなふうに宮がお心をお動かしになるようにばかり衛門督は申すのであった。

あとで東宮は淑景舎しげいしやの方かたの手から所望をおさせになったために、女にょ三さんの宮みやから唐猫からねこが献上された。噂うわさされたとおりに美しい猫であると言つて、東宮の御殿の人々はかわいがっているのであったが、衛門督は東宮は確かに興味をお持ちになってお取り寄せになりそうであると

観察していたことであつたから、猫のことを知りたく思つて幾日かのちにまた参つた。まだ子供であつた時から朱雀院すざくが特別にお愛しになつてお手もとでお使いになつた衛門督であつて、院が山の寺へおはいりになつてからは東宮へもよく伺つて敬意を表していた。琴など御教授をしながら、衛門督は、

「お猫がまたたくさんまいりましたね。どれでしょう、私の知人は」と言いながらその猫を見つけた。非常に愛らしく思われて衛門督は手でなでていた。宮は、

「實際容貌きりようのよい猫だね。けれど私には馴なつかないよ。人見知りをする猫なのだね。しかし、これまで私の飼っている猫だつてたいしてこれには劣っていないよ」

とこの猫のことを仰せられた。

「猫は人を好ききらいなどあまりせぬものでございますが、しかし賢い猫にはそんな知恵があるかもしれません」

などと衛門督は申して、また、

「これ以上のおそばに幾つもいるのでございましたら、これはしばらく私にお預からせください」

こんなお願いをした。心の中では愚かしい行為をするものであるという気もしているのである。

結局衛門督^{えもんのかみ}は望みどおりに女三の宮の猫を得ることができて、夜な

どもそばへ寝させた。夜が明けると猫を愛撫^{あいぶ}するのに時を費やす衛門督であつた。人馴^なつきの悪い猫も衛門督にはよく馴れて、どうかする

と着物の裾^{すそ}へまつわりに来たり、身体^{からだ}をこの人に寄せて眠りに来たりするようになって、衛門督はこの猫を心からかわいがるようになった。物思いをしながら顔をながめ入っている横で、に・よ・う・に・よ・う・とかわいい声で鳴くのを撫^なでながら、愛におごる小さき者よと衛門督はほえまれた。

「恋ひわぶる人の形見と手ならせば汝^{なれ}よ何とて鳴く音^ねなるらん

これも前生の約束なんだろうか」

顔を見ながらこう言うと、いよいよ猫は愛らしく鳴くのを懐中^{ふところ}に入れて衛門督は物思いをしていた。女房などは、

「おかしいことですね。にわかには猫を御寵愛ちようあいされるではありませんか。あしたのものには無関心だった方がね」

と不審がつてささやくのであった。東宮からお取りもどしの仰せがあつて、衛門督はお返しをしないのである。お預かりのものを取り込んで自身の友にしていた。

左大将夫人の玉鬘たまかざらなの尚侍は真実の兄弟に対するよりも右大将に多く兄弟の愛を持っていた。才気のあるはなやかな性質の人で、源大将の訪問を受ける時にも睦まじいふうに取り扱むっつて、昔のとおりに親しく語ってくれるため、大将も淑景舎しゅけいしゃの方が羞恥しゅうちを少なくして打ち解けようとする気持ちのないようなのに比べて、風変わりな兄弟愛の満足がこの人から得られるのであった。左大将は月日に添えて玉鬘を重んじ

ていった。もう前夫人は断然離別してしまつて尚侍が唯一の夫人であつた。この夫人から生まれたのは男の子ばかりであるため、左大將はそれだけを物足らず思い、真木柱まきばしらの姫君を引き取つて手もとへ置きたがつているのであるが、祖父しきふぎようの式部卿の宮が御同意をあそばさない。

「せめてこの姫君にだけは人からそし譏られない結婚を自分がさせてやりたい」

と言つておいでになる。帝みかどは御伯父おじのこの宮に深い御愛情をお持ちになつて、宮から奏上されることにお背そむきになることはおできにならないふうであつた。もとはからはなやかな御生活をしておいでになつて、六条院、太政大臣家に続いての権勢の見える所で、世間の信望も

得ておいでになった。左大将も第一人者たる将来が約束されている人であつたから、式部卿の宮の御孫女、むすめ左大将の長女である姫君を人は重く見ているのである。求婚者がいろいろな手を通じて来てすでに多数に及んでいるが、宮はまだだれを婿にと選定されるふうもなかった。かれにその気があればと宮が心でお思ひになる衛門督は猫ほども心を惹かぬのかまったくの知らず顔であつた。左大将の前夫人は今も病的な、陰気な暮らしを続けて、若い貴女のために朗らかな雰ふ囲気を作ろうとする努力もしてくれないために、姫君は寂しがって、人づてに聞く継母ままははの生活ぶりにあこがれを持っていた。こうした明るい娘なのである。

ひょうぶぎよう兵部卿の宮は今も御独身で、熱心にお望みになった相手は皆ほかへ

取られておしまいになる結果になって、世間体も恥ずかしくお思になるのであったが、この姫君に興味をお感じになり、縁談をお申し入れになると、式部卿の宮は、

「私はそう信じているのだ。大事に思う娘は宮仕えに出すことを第一として、続いては宮たちと結婚させることがいいとね。普通の官吏と結婚させるのを頼もしいことのように思つて親たちが娘の幸福のためにそれを願うのは卑しい態度だ」

とお言いになつて、あまり求婚期間の悩みもおさせにならずに御同意になつた。兵部卿の宮はこの無造作な決まり方を物足らぬようにもお思ひになつたが、けいべつ軽蔑しがたい相手であつたから、ずるずる延ばしで話の解消をお待ちになることもおできにならないで、通つて行くよ

うにおなりになった。式部卿の宮はこの婿の宮を大事にあそばすのであつた。宮は幾人もの女王によおうをお持ちになつて、その宮仕え、結婚の結果によつて苦勞をされることの多かつたのに懲りておいでになるはずであるが、最愛の御孫女のためにまたこうした婿かしずきをお始めになつたのである。

「母親は時がたつにしたがつて病的な女になるし、父親はそちらの意志には従わない子だと言つてそまつに見ている姫君だからかわいそうでならぬ」

などとお言いになつて、新夫婦の居間の裝飾まで御自身で手を下してなされたり、またお指図さしずをされたりもするのであつた。兵部卿の宮はお亡なくしになつた先夫人をばかり恋しがつておいでになつて、その

人に似た新婦を得たいと願っておいでになったために、この姫君を、悪くはないが似た所がないと御覧になったせいか、通っておいでになるのおつくうなふうをお見せになった。式部卿の宮は失望あそばした。病人である母君も気分の常態になっている時にはこの娘の思うようでない結婚を歎なげいて、いよいよ人生をいやなものにきめてしまった。父親の左大将もこの話を聞いて、自分のあやぶんだとおりの結果になったではないか、多情者の宮様であるからと思つて、初めから自分が賛成しなかつた婿であつたから困つたことであると歎いていた。たまかすら玉鬘夫人は宮のお情けの薄さを継娘の不幸として聞いていながら、自分ままむすめがもし結婚をしてそうした目にあつていたなら、六条院の人々へも、実父の家族へも不名誉なことになるのであつたと思つた。そして

左大将の妻になつた運命を悲しむ気もなくなり、継娘に限りなく同情した。その自分の処女時代にも兵部卿の宮を良人おとにしようとは少しも思わなかつた。ただあれだけの情熱を運んでくださった方が、左大将と平凡な夫婦になつてしまったことを輕蔑けいべつしておいでにならないかとそれ以来恥ずかしく思つていたのであると玉鬘夫人は思い、その宮が継娘の婿におなりになつて、自分のことをどう聞いておいでになるであらうと思うと晴れがましいような氣もするのであつた。この夫人からも新婚した姫君の衣裳いしやうその他の世話をした。前夫人がどう恨んでゐるかというようなことは知らぬふうにして、長男、次男を中にして好意を寄せる尚侍ないしのかみに前夫人は友情をすら覚えてゐるのであるが、式部卿の宮家には大夫人という性質の曲がつた人が一人いて、この人は常に

だれのことも憎んで、罵言ばげんをやめないのである。

「親王がたというものは一人だけの奥さんを大事になさるということ
で、派手はでな生活のできない補いにもなろうというものだのに」

と陰口かげぐちをするのが兵部卿の宮のお耳にはいった時、不愉快なことを
聞く、自分に最愛の妻があつた時代にも他との恋愛の遊戯はやめな
かつた自分も、こうまではひどい恨み言葉は聞かないでいたとお思い
になつて、いつそう亡なき夫人を恋しく思召おぼしめすことばかりがつのつて、
自邸で寂しく物思ひをしておいになる日が多かつた。そうはいうも
のの二年もその状態で続いて来た今では、ただそれだけの淡い関係の
夫婦として済んで行つた。

歳月としつきが重なり、帝みかどが即位をあそばされてから十八年になつた。

「将来の天子になる子のないことで自分には人生が寂しい。せめて気楽な身の上になって自分の愛する人たちと始終出逢うこともできるようにして、私人として楽しい生活がしてみたい」

以前からよくこう帝は仰せられたのであつたが、重く御病氣をあそばされた時にわかに讓位を行なわせられた。世人は盛りの御代みよをお捨てあそばされることを残念がつて歎なげいたが、東宮ももう大人おとなになつておいでになつたから、お変わりになつても特別変わったこともなかった。ゆるぎない大御代おおみよと見えた。太政大臣は関白職の辞表を出して自邸を出なかつた。

「人生の頼みがたさから賢明な帝王さえ御位みくらいをお去りになるのであるから、老境に達した自分が挂冠けいかんするのに惜しい気持ちなどは少しもな

い」

と言っていたに違いない。左大將が右大臣になって関白の仕事もした。御母君の女御はによご新帝の御代を待たずに亡なくなっていたから、后きざきの位にお上のぼされになっても、それはもう物の背面のことになって寂しく見えた。六条の女御のお生みした今上第一の皇子が東宮におなりになった。そうなるはずのことはだれも知っていたが、目前にそれが現われてみればまた一家の幸福さに驚きもされるのであった。右大將が大納言を兼ねて順序のままに左大將に移り、この人も幸福に見えた。六条院は御讓位になった冷泉院れいぜいに御後嗣こうしのないのを御心の中では遺憾おぼしめに思召された。実は新東宮だつて六条院の御血統なのだが、冷泉院の御在位中には御煩悶はんもんもなくて過ごされたほど、例の密通の秘密は隠し

おおされたが、そのかわりにこの御系統が末まで続かぬように運命づけられておしまいになったのを六条院は寂しく思いになったが、御口外あそばすことでもないのだただお心で味けなくお感じになるだけであつた。東宮の御母女御は皇子たちが多くお生まれになって帝の御寵はますます深くなるばかりであつた。またも王氏の人が后にお立ちになることになっていることで、今度で三代にもなっていたから何かと飽き足らぬらしい世論があるのをお知りになった時、冷泉院の中宮^{ちゅうぐう}は以前もこうした場合に六条院の強い御支持があつて、自分の後の位は定^{きま}つたのであると過去を回想あそばしてますます院の恩をお感じになった。

冷泉院の帝は御期待あそばされたとおりに、御窮屈なお思いもなし

に御幸などもおできになることになって、あちらこちらと御遊幸あそばされて、今日の御境遇ほどお楽しいものはないようにお見受けされるのであった。帝は六条院においでになる御妹の姫宮に深い関心をお持ちになったし、世間がその方に払う尊敬も大きいのであるが、なお紫夫人以上の夫人として六条院の御寵を受けておいでになるのではなかった。年月のたつにしたがって女王と宮の御中にこまやかな友情が生じて、六条院の中は理想的な穏やかな空氣に満たされているが、紫夫人は、

「もう私はこうした出入りの多い住居すまいから退きまして、静かな信仰生活くわんごうがしたいと思います。人生とはこんなものということも経験してしまつたような年齢としにもなっているのですもの、もう尼になることを許

してくださいませんか」

と、時々まじめに院へお話するのであるが、

「もつてのほかですよ。そんな恨めしいことをあなたは思うのですか。それは私自身が実行したいことなのだが、あなたがあとに残って寂しく思ったり、私といっしょにいる時と違った世間の態度を悲しく感じたりすることになってはという気がかりがあるために現状のままにいるだけなのですよ。それでもいつか私の実行の日が来るでしょう、あなたはそのあとのことになさい」

などとばかり院はお言いになって、夫人の志を妨げておいでになった。女御は今も女王を真実の母として敬愛していて、明石夫人は隠れた女御の後見をするだけの人になって謙遜けんそんさを失わないでいること

は、かえつて将来のために頼もしく思われた。尼君もうれし泣きの涙を流す日が多くて、目もふきただれて幸福な老婆の見本になっていた。

住吉すみよしの神への願果たしを思い立つて参詣さんけいする女御は、以前に入道かれにはかなり大がかりなことを多く書き立ててあつた。年々の春秋の神楽かぐらとともに必ず長久隆運の祈りをするなどとは、今日の女御の境遇になつていなければ実行のできぬことであつた。ただ走り書きにした文章にも入道の学問と素養が見え、仏も神も聞き入れるであろうことが明らかに知られた。どうしてそんな世捨て人の心にこんな望みの楼閣が建てられたのであらうと、子孫への愛の深さが思われもし、神

や仏に済まぬ氣もされた。並みの人ではなくてしばらく自分の祖父になつてこの世へ姿を現わしただけの、功德を積んだ昔の聖僧ではなかつたかなと思われ、女御に明石あかしの入道を畏敬いけいする心が起こつた。今度はまだ女御の行なうことにはせずに、六条院の参詣におつれになる形式で京を立つたのであつた。

須磨すま明石時代に神へお約しになつたことは次々に果たされたのであるが、その以後もまた長く幸運が続き、一門子孫の繁栄を御覧になることによつても神の冥助めいじょは忘れずに六条院は紫の女王によおうも伴つて御参詣あそばされるのであつて、はなやかな一行である。簡素を旨として国の煩いになることはお避けになつたのであるが、この御身分であつてはある所までは必ず備えられねばならぬ旅の形式があつて、自然に

大きなことにもなった。公卿こうけいも二人の大臣以外は全部供奉ぐぶした。神前の舞い人は各衛府えふの次将たちの中の容貌ようぼうのよいのを、さらに背丈せたけをそろえてとられたのであった。落選なげして歎く風流公子もあった。奏樂者も石清水いwashimizuや賀茂かもの臨時祭に使われる専門家がより整えられたのであるが、ほかから二人加えられたのは近衛府このえふの中で音楽じやうずの上手として有名になっている人であった。また神樂のほうを受け持つ人も多数に行つた。宮中、院、東宮の殿上役人が皆御命令によつて供奉ぐぶの中にいるのも無数にあつた。華奢かしやを尽くした高官たちの馬、鞍くら、馬添みくろい侍、隨身、小侍の服装までもきらびやかな行列であつた。院の御車みくるまには紫夫人と女御をいっしょに乗せておいでになつて、次の車には明石夫人とその母の尼とが目だたぬふうに乗っていた。それには古い知り合いの

女御の乳母めのとが陪乗したのである。女房たちの車は夫人付きの者のが五台、女御のが五台、明石夫人に属したのが三台で、それぞれに違った派手はでな味のある飾りと服装が人目に立った。明石の尼君がいつしよに來たのは、

「今度の参詣に尼君を優遇して同伴しよう。老人の心に満足ができるほどにして」

と院がお言い出しになったのであって、はじめ明石夫人は、

「今度は院と女王様が主になっての御参詣なんですから、あなたなどが混じっておいでになっては私の立場も苦しくなりますからね、女御さんがもう一段御出世をなすったあとで、その時に私たちだけでお参りをいたしましょう」

と言つて、尼君をとどめていたのであるが、老人はそれまで長命で生きておられる自信もなく心細がつてそつと一行に加わつて来たのである。運命の寵児ちやうじであることがしかるべきことと思われる女王や女御よりも、明石の母と娘の前生の善果がこの日ほどあざやかに見えたこともなかつた。

十月の二十日はつかのことであつたから、中の忌垣いがきに這はう葛くずの葉も色づく時で、松原の下もみじの雑木の紅葉が美しくて波の音だけ秋であるともいわれない浜のながめであつた。本格的な支那しな樂高麗こうらい樂よりも東遊あづまびの音樂のほうがかんな時にはぴつたりと、人の心にも波の音にも合つてゐるようであつた。高い梢こずえで鳴る松風の下で吹く笛の音もほかの場所であらうと聞き音とは変わつて身にしみ、松風が琴に合わせる拍子は鼓を打つて

するよりも柔らかでそして寂しくおもしろかった。伶人^{れいじん}の着けた小忌^{おみご}衣竹^{ろも}の模様と松の緑が混じり、挿頭^{かざし}の造花は秋の草花といつしよになつたように見えるが、「求^{もと}の子^{めこ}」の曲が終わりに近づいた時に、若い高官^{こうかん}たちが正装^{しょうさう}の袍^{ほう}の肩を脱いで舞の場へ加わつた。黒の上着の下から臙脂^{えんじ}、紅紫^{こうし}の下襲^{したかさね}の袖^{そで}をにわかに出し、それからまた下の柏^{あこめ}の赤い袂^{たもと}の見えるそれらの人の姿を通り雨が少しぬらした時には、松原であることも忘れて紅葉のいろいろが散りかかるように思われた。その派手^{はで}な姿に白くほおけた荻^{おぎ}の穂^ほを挿^さしてほんの舞^{ひとふし}の一節^{ひとふし}だけを見せてはいつたのがきわめておもしろかつた。

院は昔を追憶しておいでになつた。中途で不幸な日のあつたことも目の前のことのように思われて、それについては語る人もお持ちにな

らぬ院は、関白を退いた太政大臣を恋しく思召おぼしめされた。車へお歸りに
なつた院は第二の車へ、

たれかまた心を知りて住吉すみよしの神代を経たる松にこと問ふ

という歌を懷中紙ふところがみに書いたのを持たせておやりになつた。尼君は心
を打たれたように萎しおれてしまった。今日のはなやかな光景を見るにつ
けても、明石を源氏のお立ちになつたころの歎なげかわしかったこと、女
御が幼児であつたころにした悲しい思いが追想されて、運命に恵まれ
ていることを知つた。そしてまた山へはいつた良人おとこも恋しく思われて
涙のこぼれる気持ちをおさえて、

住^{すみ}の江を生けるかひある渚^{なぎさ}とは年ふるあまも今日や知るらん

と書いた。お返事がおそくなつては見苦しいと思い、感じたままの歌をもつてしたのである。

昔こそ先^まづ忘れね住吉の神のしるしを見るにつけても

とまた独言^{ひとりごと}もしていた。一行は終夜を歌舞に明かしたのである。二^は十日^{つか}の月の明りではるかに白く海が見え渡り、霜が厚く置いて松原の昨日とは変わった色にも寒さが感じられて、快く身にしむ社前の朝ぼらけであった。自邸での遊びには馴^なれていても、あまり外の見物に出

ることを好まなかつた紫の女王は京の外の旅もはじめての経験であつたし、すべてのことが興味深く思われた。

住の江の松に夜深く置く霜は神の懸^かけたる木綿^{ゆふ}かつらかも

紫夫人の作である。小野篁^{おののたかむら}の「比良^{ひら}の山さへ」と歌つた雪の朝を思つて見ると、奉つた祭りを神が嘉納^{かのう}された証^{あかし}の霜とも思われて頼もしいのであつた。

女御^{によご}、

神人^{かんびと}の手に取り持たる榊^{さかき}葉^はに木綿^{ゆふ}かけ添ふる深き夜の霜

なかつかさ
中務の君、

祝子^{はふりこ}が木綿^{ゆふ}うち紛ひ置く霜は実^げにいちじるき神のしるしか

そのほかの人々からも多くの歌は詠^よまれたが、書いておく必要がないと思つて筆者は省いた。こんな場合の歌は文学者らしくしている男の人たちの作も、平生よりできの悪いのが普通で、松の千歳^{ちとせ}から解放されて心の琴線に触れるようなものはないからである。

朝の光がさし上るころにいよいよ霜は深くなって、夜通し飲んだ酒のために神楽^{かぐら}の面ようになった自身の顔も知らずに、もう篝火^{かがりび}も消えかかっている社前で、まだ万歳万歳と桺^{さかき}を振つて祝い合っている。

この祝福は必ず院の御一族の上に形となつて現われるであらうとますますはなばなしく未来が想像されるのであつた。非常におもしろくて千夜の時のあれと望まれた一夜がむぞうさに明けていったのを見て、若い人たちは渚なぎさの帰る波のようにここを去らねばならぬことを残念がつた。はるばると長い列になつて置かれた車の、垂たれ絹の風に開く中から見える女衣装は花の錦にしきを松原に張つたようであつたが、男の人たちの位階によつて変わった色の正装をして、美しい膳部みくらまを院の御車へ運び続けるのが布衣ほいたちには非常にうらやましく見られた。明石の尼君の分も浅香の折敷おしきに鈍色にびの紙を敷いて精進物で、院の御家族並みに運ばれるのを見ては、

「すばらしい運を持った女というものだね」

などと彼らは仲間で言い合った。おいでになった時は神前へささげられる、持ち運びの面倒な物を守る人数も多くて、途中の見物も十分におできにならなかったのであったが、帰途は自由なおもしろい旅をされた。この楽しい旅行に山へはいりきりになった入道を与^{あず}らせることのできなかったことを院は物足らず思召されたが、それまでは無理なことであろう。実際老入道がこの一行に加わっているとしたら見苦しいことでなかったであろうか。その人の思い上がった空想がことごとく実現されたのであるから、だれも心は高く持つべきであると教訓をされたようである。いろいろな話題になって明石の人たちがうらやまれ、幸福な人のことを明石の尼君という言葉もはやった。太政大臣家の近江^{おうみ}の君は双六^{すごろく}の勝負^{さい}の賽^{さい}を振る前には、

「明石^{あかし}の尼様、明石の尼様」

と呪文^{じゅもん}を唱えた。

法皇は仏勤めに精進あそばされて、政治のことなどには何の干渉もあそばさない。春秋^{みゆき}の行幸をお迎えになる時にだけ昔の御生活がお心の上に姿を現わすこともあるのであった。女三^{によさん}の宮をな^{みや}お氣がかりに思召^{おぼしめ}されて、六条院は形式上の保護者と見て、内部からの保護を帝^{みかど}にお託しになった。それで女三の宮は二品^{にほん}の位にお上げられになって、得させられる封戸^{ふこ}の数も多くなり、いよいよはなやかなお身の上になったわけである。紫夫人は一方の夫人の宮がこんなふうに年月に添えて勢力の増大していくのに対して、自分はただ院の御愛情だけを力にして今の所は負^ひけ目がないとしても、そのお志というものも遂には

衰えるであろう、そうした寂しい時にあわない前に今のうちに善処したいとは常に思っていることであつたが、あまりに賢がるふうに思われてはという遠慮をして口へたびたびは出さないのである。院は法皇だけでなく帝までが関心をお持ちになるということがおそれおおく思召されて、冷淡にする^{うわさ}噂を立てさすまいというお心から、今ではあちらへおいでになることと、こちらにおられることとがちようど半々ほどになつていた。道理なこととは思ひながらもかねて思つたとおり寂しい日の来始めたことに女王は悲しまれたが、表面は冷静に以前のとおりにしていた。東宮に次いでお生まれになつた女一の宮を紫夫人は手もとへお置きしてお育て申し上げていた。そのお世話の楽しさに院のお留守^{るす}の夜の寂しさも慰められているのであつた。御孫の宮はど

の方をも皆非常にかわいく夫人は思っているのである。花散里夫人は紫夫人も明石夫人も御孫宮がたのお世話に没頭しているのがうらやましくて、左大将の典侍にないしのすけ生ませた若君を懇望して手もとへ迎えたのを愛して育てていた。美しい子でりこうなこの孫君を院もおかわいがりになった。院は御子の数が少ないように見られた方であるが、こうして広く繁栄する御孫たちによって満足をしておいでになるようである。右大臣が院を尊敬して親しくお仕えすることは昔以上で、玉鬘たまかざらももう中年の夫人になり、何かの時には六条院へ訪ねて来て紫夫人にも逢あつて話し合うほかに親しみ深い往来が始終あつた。姫宮だけは今日もなお少女おとめのようなたよりなさで、また若々しさでおいでになった。もう宮廷の人になりきってしまった女御に気づかいがなくおなり

になった院は、この姫宮を幼い娘のように思召して、この方の教育に力を傾けておいでになるのであった。

朱雀院の法皇はもう御命数も少なくなつたように心細くばかり思召されるのであるが、この世のことなどはもう顧みないことにしたいとお考えになりながらも、女三の宮にだけはもう一度お逢いあそばされたかつた。このまま亡くなつて心の残るのはよろしくないことであるから、たいそうにはせず宮が訪ねておいでになることをお言いやりになった。院も、

「ごもつともなことですよ。こんな仰せがなくともこちらから進んでお伺いをなさらなければならぬのに、ましてこうまでお待ちになつておられるのだから、実行しないではお気の毒ですよ」

とお言いになり、機会をどんなふうにして作ろうかと考えておいでになった。何でもなくそつと伺候をするようなことはみすばらしくてよろしくない。法皇をお喜ばせかたがた外見の整ったことがさせたいとお思いになるのである。来年法皇は五十におなりになるのであったから、若菜の賀を姫宮から奉らせようかと院はお思いつきになって、それに付帯した法会ほうえの布施ふせにお出しになる法服したくの仕度をおさせになり、すべて精進でされる御宴会の用意であるから普通のことに変わつて、苦心の払われることを今からお指図さしずになっていた。昔から音楽がことにお好きな方であったから、舞の人、楽の人にすぐれたのを選定しようとしておいでになった。右大臣家の下の二人の子、大將の子を典侍腹のも加えて三人、そのほかの御孫も七歳以上の皆殿上勤めをさ

せておいでになった。それらと、兵部卿の宮のまだ元服前の王子、そのほかの親王がたの子息、御親戚しんせきの子供たちを多く院はお選びになった。殿上人たちの舞い手も容貌ようぼうがよくて芸のすぐれたのを選びととて多く曲の用意ができた。非常な晴れな場合と思つてその人たちは稽古けいこを励むために師匠になる専門家たちは、舞のほうのも樂のほうのも繁忙をきわめていた。女三の宮は琴の稽古を御父の院のお手もとでしておいでのたつたのであるが、まだ少女時代に六条院へお移りになつたために、どんなふうにもその芸はなつたかと法皇は不安に思召して、

「こちらへ来られた時に宮の琴の音が聞きたい。あの芸だけは仕上げたことと思うが」

と言つておいでになることが宮中へも聞こえて、

「そう言われるのは決して平凡なお手並みでない芸に違いない。一所懸命に法皇の所へ来てお弾^ひきになるのを自分も聞きたいものだ」

などと仰せられたということがまた六条院へ伝わつて来た。院は、

「今まで何かの場合に自分からも教えているが、質はすぐれているがまだたいした芸になつていないのを、何心なくお伺いされた時に、ぜひ弾けと仰せになつた場合に、恥ずかしい結果を生むことになつてはならない」

とお言いになつて、それから女三の宮に熱心な琴の教授をお始めになつた。変わったものを二、三曲、また大曲の長いのが四季の氣候によつて変わる音、寒い時と空氣の暖かい時によつての弾き方を変えね

ばならぬことなどの特別な奥義をお教えになるのであったが、初めはたよりないふうであつたものの、お心によくはいつてきて上手じょうずにおなりになつた。昼は人の出入りの物音の多さに妨げられて、絃いとを揺ゆすつたり、おさえて変わる音の繊細な味を研究おさせになるのに不便なために、夜になつてから静かに教うべきであるとお言いになつて、女王にょおうの了解をお求めになつて院はずつと宮の御殿のほうへお泊まりきりになり、朝夕のお稽古けいこの世話をあそばされた。女御にょぎにも女王にも琴はお教えにならなかつたのであつたから、このお稽古の時に珍しい秘曲もお弾きになるのであろうことを予期して、女御も得ることの困難なお暇いとまをようやくしばらく得て帰邸したのであつた。もう皇子を二人お持ちしているのであるが、また妊娠して五月ほどになつていたから、神

事の多い季節は御遠慮したいと言ってお暇を願って来たのである。

十一月が過ぎるともどるようにと宮中からの御催促が急であるのもさしおいて、このごろの樂の音のおもしろさに女御は六条院を去りたいのであった。なぜ自分には教えていただけなかったのかと院を恨めしく思いもしていた。普通と変わって冬の月を最も好みになる院は、雪のある月夜にふさわしい琴の曲をお弾きになって、女房の中の樂才のあるのに他に樂器で合奏をさせたりして楽しんでおいでになった。

年末などはことに對の女王が忙しくていっさいの心配りのほかに、女御、宮たちのための春の仕度したくに追われて、

「春ののどかな気分になった夕方などにこの琴の音をよくお聞きした

い」

などと言っていたが年も変わった。

年の初めにまず帝みかどからののはなやかな御賀を法皇はお受けになることになっていて、差し合ってはよろしくないと院は思召し、少したった二月の十幾日のころと姫宮の奉られる賀の日をお定めきになり、樂の人、舞い手は始終六条院へ来てその下稽古を熱心にする日が多かった。

「対の女王がいつもお聞きしたがっているあなたの琴と、その人たちの十三絃げんや琵琶びわを一度合奏する女ばかりの催しをしたい。現代の大家といっても私の家族たちの音楽に対する態度より純真なものを持っていませんよ。私はたいした音楽者ではないが、すべての芸に通じてお

きたいと思つて、少年の時から世間の専門家を師にしてつきもしたし、また貴族の中の音楽の大家たちにも教えを乞うたものですが、特に尊敬すべき芸を持った人と思われるのはなかった。その時代よりもまた現在では音楽をやる人の素質が悪くなつて、芸が浅薄になつてい
ると思う。琴などはまして稽古をする者がなくなつたということですからあなただけ弾ける人はあまりないでしょう」

と院がお言いになると、宮は無邪氣に微笑ほほえんで、自分の芸がこんなにも認められるようになったかと喜んでおいでになつた。もう二十一、二でおありになるのであるが、幼稚な所が抜けないで、そして見たお姿だけは美しかった。

「長くお目にかからないでおいでになるのだから、大人になつてりつ

ぱになったと認めていただけるようにしてお目にかからなければいけませんよ」

と事に触れて院は教えておいでになるのであった。実際こうした良^{おつ}人がおいでにならなければ外間のいろいろな噂^{うわさ}にさえされる方であつたかもしれないと女房たちは思っていた。

一月の二十日過ぎにはもうよほど春めいてぬるい微風^{そよかぜ}が吹き、六条院の庭の梅も盛りになつていった。そのほかの花も木も明日の約されたような力が見えて、杜^{もり}は霞^{かす}み渡っていた。

「二月になつてからでは賀宴^{しちやく}の仕度で混雑するであろうし、こちらだけですることもその時の下調べのように思われるのも不快だから、今のうちがよい、あちらで会をなさい」

と院はお言いになつて女王を寢殿のほうへお誘いになつた。供を
たいという希望者は多かつたが、寢殿の人と知り合いになつてい
外の人は残された。少し年はいつている人たちであるがりっぱな女房
たちだけが夫人に添つて行つた。童女は顔のいい子が四人ついて行
た。朱色の上に桜の色の汗かざみ衫を着せ、下には薄色の厚織あこめの柏あこめ、浮き模
様のある表袴おもてばかま、肌はだには槌つちの打ち目のきれいなのをつけさせ、身の姿態とりなし
も優美なのが選ばれたわけであつた。女御の座敷のほうも春の新しい
装飾がしわたされてあつて、華奢かしやを尽くした女房たちの姿はめざまし
いものであつた。童女は臙脂えんじの色の汗かざみ衫に、支那綾しなあやの表袴で、柏あこめは山
吹色ぶきの支那錦にしきのそろいの姿であつた。明石夫人の童女は目だたせない
ような服装をさせて、紅梅色を着た者が二人、桜の色が二人で、下は

皆青色を濃淡にした柏で、これも打ち目のでき上がりのよいものを下につけさせてあった。姫宮のほうでも女御や夫人たちの集まる日であつたから、童女の服装はことによくさせてお置きになつた。青丹あおにの色の服に、柳の色の汗衫かざみで、赤紫の柏あこめなどは普通の好みであつたが、なんとなく気高く感ぜられることは疑いもなかつた。縁側に近い座敷けだかの襖子からかみをはずして、貴女たちの席は几帳きちようを隔てにしてあつた。中央の室には院の御座おんざが作られてある。今日の拍子合わせの笛の役には子供を呼ぼうとお言いになつて、右大臣家の三男で玉鬘夫人たまかづらの生んだ上のほうの子が笙しょうの役をして、左大将の長男に横笛の役を命じ縁側へ置かれてあつた。演奏者の茵しとねが皆敷かれて、その席へ院の御秘蔵の楽器が紺錦こんにしきの袋などから出されて配られた。明石夫人は琵琶びわ、紫の女王には

和琴^{わごん}、女御は箏^{そう}の十三絃^{げん}である。宮はまだ名楽器などはお扱いにくいであろうと、平生弾いておいでになるので調子を院がお弾き試みになつたのをお配らせになつた。院は、

「箏^{そう}の琴^{こと}は絃がゆるむわけではないが、他の楽器と合わせる時に琴柱^{ことじ}の場所が動きやすいものだから、初めからその心得でいなければならぬが、女の力では十分締めることがむずかしいであろうから、やはりこれは大将に頼まなければなるまい。それに拍子を受け持つてゐる少年たちもあまり小さくて信用のできない点もあるから」

とお笑いになりながら、

「大将にこちらへ」

とお呼び出しになるのを聞いて、夫人たちは恥ずかしく思つてい

た。明石夫人以外は皆院の御弟子なのであるから、院も大将が聞いて難のないようにとできればえを祈っておいになった。女御は平生から陛下の前で他の人と合奏も仕馴なれているからだいじょうぶ落ち着いた演奏はできるであろうが、和琴というものはむずかしい物でなく、きまったことがないだけ創作的の才が必要なのを、女の弾き手はもてあましはせぬか、春の絃楽は皆しっくり他に合ってゆかねばならぬものであるが、和琴がうまくいっしょになってゆかねようなことはないかとも損な弾き手に同情もしておいになった。

左大将は晴れがましくて、音楽会のいかなる場合に立ち合うよりも気のつかわれるふうで、きれいな直衣のうしを薰香たきものの香のよく染しんだ衣服みなりに重ねて、なおも袖そでをたきしめることを忘れずに整った身姿みなりのこの人が

現われて来たころはもう日が暮れていた。感じのよい早春の黄昏^{たそがれ}の空の下に梅の花は旧年に見た雪ほどたわわに咲いていた。ゆるやかな風の通り通うごとに御簾^{みす}の中の薰香^{たきもの}の香も梅花の匂^{にお}いを助けるように吹き迷^{うぐいす}つて鶯を誘うかと見えた。御簾の下のほうから箏^{そう}の琴^{こと}のさきのほうを少しお出しになつて、院が、

「失礼だがこの絃^{いと}の締まりぐあいをよく見て調音をしてほしい。他人に来てもらうことのできない場合だから」

とお言いになると、大將はうやうやしく琴を受け取つて、一越^{いっこつ}調の音^ねに発^{はつ}の絃^{いと}の標準の柱^じを置き全体を弾き試みることはせずにそのまま返そうとするのを院は御覧になつて、

「調子をつけるだけの一弾きは気どらずにすべきだよ」

と院がお言いになった。

「今日の会に私がいささかでも音を混ぜますようなだいそれた自信は持っておりません」

大将は遠慮してこう言う。

「もつともだけれども、女だけの音楽に引きさがった、逃げたと言われるのは不名誉だろう」

院はお笑いになった。で大将は調子をかき合わせて、それだけで御^み簾^すの中へ入れた。院の御孫にあたる小さい人たちが美しい直衣^{のうし}姿をして吹き合わせる笛の音はまだ幼稚ではあるが、有望な未来の思われる響きであった。かき合わせが済んでいよいよ合奏になったが、どれもおもしろく思われた中に、琵琶^{びわ}はすぐれた名手であることが思われ、

神さびた撥^{ばち}使いで澄み切った音をたてていた。大将は和琴に特別な関心を持っていたが、それはなつかしい、柔らかな、愛嬌^{あいきよう}のある爪^{つま}音^{おと}で、逆にかく時の音が珍しくはなやかで、大家のもったいらしくして弾くのに少しも劣らない派手^{はで}な音は、和琴にもこうした弾き方があるかと大将の心は驚かされた。深く精進を積んだ跡がよく現われたことによつて院は安心をあそばされて夫人をうれしくお思いになった。十三絃の琴は他の楽器の音の合い間合い間に繊細な響きをもたらすのが特色であつて、女御の爪^{つま}音^{おと}はそこにもきわめて美しく艶^{えん}に聞こえた。琴は他に比べては洗練の足らぬ芸と思われたが、お若い稽古^{けいこ}盛り年の年ごろの方であつたから、確かな弾き方はされて、ほかの楽器と交響する音もよくて、上達されたものであると大将も思った。この人が

拍子を取って歌を歌った。院も時々扇を鳴らしてお加えになるお声が昔よりもまたおもしろく思われた。少し無技巧的におなりになったようである。大将も美音の人で、夜のふけてゆくにしたがつて音楽三昧^{さんまい}の境地が作られていった。月がややおそく出るころであつたから、燈籠^{ろうろう}が庭のそここにともされた。院が宮の席をおのぞきになると、人よりも小柄なお姿は衣服だけが美しく重なっているように見えた。はなやかなお顔ではなくて、ただ貴族らしいお美しさが備わり、二月二十日ごろの柳の枝がわずかな芽の緑を見せているようで、鶯^{うぐいす}の羽風にも乱れていくかと思われた。桜の色の細長を着ておいでになるのであるが、髪は右からも左からもこぼれかかつてそれも柳の糸のようである。これこそ最上の女の姿というものであらうと院はおながめになる。

のであつたが、女御には同じような艶えんな姿に今一段光る美の添つて見える所があつて、身のとりなしに氣品のあるのは、咲きこぼれた藤ふじの花が春から夏に続いて咲いているころの、他に並ぶもののない優越した朝ぼらけの趣であるとい院は御覽になつた。この人は身ごもつていて、それがもうかなりに月が重なつて悩ましいころであつたから、濟んだあとでは琴を前へ押しやつて苦しうに脇息きようそくへよりかかつているのであるが、背の高くない身体からだを少し伸ばすようにして、普通の大きな脇息へ寄つているのが氣の毒で、低いのを作り与えたい氣もされて憐あわれまれた。紅梅の上着の上にはらはらと髪のかかった灯ほかげの姿の美しい横に、紫夫人が見えた。これは紅紫かと思われる濃い色の小桂こうちぎに薄臙脂えんじの細長を重ねた裾すそに余つてゆるやかにたまつた髪がみごと

で、大きさもいい加減な姿で、あたりがこの人の美から放射される光で満ちているような女王^{にようおう}は、花にたとえて桜といつてもまだあたらないほどの容色なのである。こんな人たちの中に混じって明石夫人は当然見劣りするはずであるが、そうとも思われぬだけの美容のある人で、聡明^{そうめい}らしい品のよさが見えた。柳の色の厚織物の細長に下へ萌葱^{もえぎ}かと思われる小桂^{しょうけい}を着て、薄物の簡単な裳^もをつけて卑下した姿も感じがよくて侮^{あな}ずらわしくは少しも見えなかった。青地の高麗錦^{こまにしき}の縁^{ふち}を取った敷き物の中央にもすわらずに琵琶^{びわ}を抱いて、きれいに持った撥^{はち}の尖^{さき}を絃^{いと}の上に置いているのは、音を聞く以上に美しい感じの受けられることであつて、五月の橘^{さつきたちばな}の花も実もついた折り枝が思われた。いずれもつつましくしているらしい内のものの気配^{けはい}に大将の心は惹^ひかれ

るばかりであつた。紫の女王の美は昔の野分の夕べよりもさらに加わっているに違いないと思うと、ただその一事だけで胸がとどろきやまない。女三にょさんの宮みやに対しては運命が今少し自分に親切であつたなら、自身のものとしてこの方を見ることができたのであつたと思うと、自身の臆病おくびようさも口惜くちおしかつた。朱雀院すざくからはたびたびそのお気持ちを示され、それとなく仰せになつたこともあつたのであるがと思いながらも、よく隙すきの見えることを知つては女王に惹かれたほど心は動きもしないのであつた。女王とはだれも想像ができぬほど遠い間隔のある所に置かれている大將は、その忘れがたい感情などは別として、せめて自分の持つ好意だけでも紫の女王に認めてもらうだけを望んでできないのを考えては煩悶はんもんしているのである。あるまじい心などはいだ

いていない、その思いを抑制することはできる人である。

夜がふけてゆくらしい冷ややかさが風に感ぜられて臥待月が上り始ふしまちつき

めた。

「たよりない春の朧月夜だ。おぼろ秋のよさというのもまたこうした夜の音楽と虫の音がいっしょに立ち上ってゆく時にあるものだね」

と院は大将に向かってお言いになった。

「秋の明るい月夜には、音楽でも何の響きでも澄み通って聞こえますが、あまりきれいに作り合わせたような空とか、草花の露の色とかは、専念に深く音楽を味わわせなくなる気がします。やはり春のたよりない雲の間から朧な月が出ますほどの夜に、静かな笛の音などの上ってゆくのを聞きますほうが、音楽そのものを楽しむのにはよい

かと思われまゝ。女は春を憐あわれむという言葉がございますがもつともなことと思われまゝ。すべてのものの調子がしっくり合うのは春の夕方に限るように考えられますが」

と大将が言うと、

「それは断定的には言えないことだ。古人でさえ決めかねたことなのだから、末世のわれわれの力で正しい批判のできるわけもない。ただ音楽のほうでは秋の律の曲を、春の呂りょの曲の下に置かれていることだけは今君が言ったような理由があるからだろう」

院はこう仰せられた。また、

「どう思ふかね。現在の優秀な音楽家とされている人たちの、宮中などのお催しなどの場合に演奏を命ぜられる人の聴きいても名人だと思

われるのは少なくなったようだが、先輩についてよく研究をしようとするような熱心が足りないのかね。今日のような女ばかりの音楽の会に交じっても、格別きわだつと思われる人があるようにも思われな
い。しかしそれは近年の私がどこへも行かずに一所に引きこもっていて、鑑識が悪く偏してしまつたのかもしれないが、とにかく感激を覚えさせられる音楽者のいないのは残念だ。どんな芸事も演ぜられる場所によつては平生と違つたできばえを見せるものであるが、最も晴れの場所の宮中でのこのごろの音楽の遊びに選出される人たちに、この女性たちのを比べて劣つていると思う点があるかね」

「それを申し上げたいと思つたのでございますが、しかし頭の悪い私はでたらめを申すことになるかもしれません。今の世間の者は昔の音

樂の盛んな時を知らないからでもありますか衛門督えもんのかみの和琴、兵部卿ひょうぶきょうの宮様の琵琶びわなどを激賞いたします。私どもも妙技とはしておりますが、今晚の皆様の御演奏には驚愕きょうがくいたしました。はじめはたいしたお遊びでもあるまいと軽く考えていたためにいつそう感激が大きいのでございましょうか。歌の役はまことに気がさして勤めにくうございました。和琴は太政大臣によってだけすべての楽音を率いるような巧妙な音のたつものと思っております、その境地へは一步も他の者がはいれないものと思われるむずかしい芸でございしますが、今晚のはまた特別なものでございました。結構でした」

大將はほめた。

「そんな最大級の言葉でほめられるほどのものではないのだが」

得意な御微笑が院のお顔に現われた。

「私にはまずできそこねの弟子はないようだね。琵琶だけは私に骨を折らせた弟子でしの芸ではないがすぐれたものであったはずだ。意外なところで私の発見した天性の弾き手なのだよ。ずいぶん感心したものだ、そのころよりはまた進歩したようだ」

こうして皆御自身の功にしてお言いになるのを聞いていて、女房たちなどは肱ひじを互いに突き合わせたりして笑っていた。

「すべての芸というものは習い始めると奥の深さがわかって、自分で満足のできるだけを習得することはとうていできないものなのだが、しかしそれだけの熱を芸に持つ人が今は少ないから、少しでも稽古けいこを積んだことに自身で満足して、それで済ませていくのだが、琴という

ものだけはちよつと手がつけられないものなのだよ。この芸をきわめれば天地も動かすことができ、鬼神の心も柔らげ、悲境にいた者も樂しみを受け、貧しい人も出世ができて、富貴な身の上になり、世の中の尊敬を受けるようなことも例のあることなのだ。この芸の伝わった初めの間は、これを学ぶ人は皆長く外国へ行っていて、あらゆる困難に打ち勝って、上達しようとしたものだが、そうまでして成功したものの数はわずかだったのだ。実際すぐれた琴の音は月や星の座を変えさせることもあったし、その時季でなしに霜や雪を降らせたり、黒雲が湧^わき出したり、雷鳴がそのためにしたりしたことも昔はあったのだよ。だれも音楽のうちの最高のものと知っていても、完全にその芸を習いおおせるものが少なかったし、末世にはなるし、今残っているの

は昔のほんとうのものの断片だけの価値のものかとも思われる。それでもまだ鬼神が耳をとどめるものになっている琴の稽古けいこをなまじいにして、上達はできずにかえっているいろいろな不幸な終わりを見たりする人があるものだから、琴の稽古をする者は不吉を招くというような迷信もできて、近ごろではこの面倒な芸を習う人が少なくなったということだね。遺憾なことだ。琴がなくては世の中の音楽が根本の音を持たないものになるのだからね。すべての物は衰えかけると早い速力で退化する一方なんだから、そんな中で一人の人間だけが熱心にその芸に志して、高麗こうらい、支那しなと渡り歩いて家族も何も顧みない者になってしまうのも狂的だから、それほどはしなくても、この芸がどんなものであるかを知りうるだけのことを私はしたいと思って、一曲でも十分に

習いうることは困難なものとしても、これにはむずかしい無数の曲目のあるものなのだから、若くて音楽熱の盛んな年ごろの私は世の中にあるだけの琴の譜を調べたり、あちらから来ているものは皆手もとへ取り寄せて、それによって研究をしたが、しまいには私以上の力のある先生というものもなくなって不便だったものの、独学で勉強をしたが、それでも古人の芸に及ぶものでは少しもなかったのだからね。ましてこれからは心細いものになるだろうとこの芸について私は悲しんでいる」

などと院のお語りになるのを聞いていて大将は自身をふがいなく恥ずかしく思った。

「今上きんじょうの親王が御成人になれば、それまで生きているかどうかおぼつ

かないことだが、その時に私の習いえただけの琴の芸をお授けしよう
と願っている。二の宮は今からそうした天分を持たれるようだから」
このお言葉を明石夫人は自身あかしの名誉であるように涙ぐんで側聞かたえぎきを
していたのであった。

女御は箏そうを紫夫人に譲って、悩ましい身を横たえてしまったので、
和琴わごんを院がお弾ひきになることになって、第二の合奏は柔らかい気分の
派手はでなものになって、催馬楽さいばらの葛城かつらぎが歌われた。院が繰り返しの所々
で声をお添えになるのが非常に全体を美しいものにした。月の高く上
る時間になり、梅花の美もあざやかになってきた。十三絃げんの箏そうの音
は、女御のは可憐かれんで女らしく、母の明石夫人に似た揺ゆの音が深く澄ん
だ響きをたてたが、女王のはそれとは変わってゆるやかな気分が出

て、聴^きき手の心に酔いを覚えるほどの愛嬌^{あいぎよう}があり、才のひらめきの

添ったものであつた。合奏の末段になつて呂^{りよ}の調子が律になる所の掻

き合わせがいつせいにはなやかになり、琴は五つの調べの中の五六の

絃^{いと}のはじき方をおもしろく宮はお弾きになつて、少しも未熟と思われる

点がなく、よく澄んで聞こえた。春と秋その他のあらゆる場合に變

化させねばならぬ弾法の使いこなしようを院がお教えになつたのを誤

たずによく会得して弾いておいでになるのに、院は誇りをお覚えに

なつた。小さい御孫たちが熱心に笛の役を勤めたのをかわいく院は思^{おぼ}

召^{しめ}して、

「眠くなつただろうのに、今晚の合奏はそう長くしないはずでわずかな予定だつたのがつい感興にまかせて長く続けていて、それも楽音で

時間を知るほどの敏感がなく、思わずおそくなつて、思いやりのないことをした」

とお言いになり、笙しょうの笛を吹いた子に酒杯をお差しになり、御服を脱いでお与えになるのであった。横笛の子には紫夫人のほうから厚織物の細長に袴はかまなどを添えて、あまり目だたせぬ纏頭てんとうが出された。大將には姫宮の御簾みすの中から酒器かわらけが出されて、宮の御装束一そろいが纏頭にされた。

「変ですね。まず先生に御褒美ほうびをお出しにならないで。私は失望した」

院がこう冗談じょうだんをお言いになると、宮の几帳きちようの下からお贈り物の笛が出た。院は笑いながらお受け取りになるのであったが、それは非常に

よい高麗笛であつた。少しお吹きになると、もう退出し始めていた人たちの中で大将が立ちどまつて、子息の持っていた横笛を取つてよい音に吹き合わせるのが、至芸と思われるこの音を院はうれしくお聞きになり、これもまた自分の弟子^{でし}であつたと満足されたのであつた。

大将は子供をいっしょに車へ乗せて月夜の道を歸つて行つたが、いつまでも第二回のおりの箏の音が耳についていて、遣^やる瀬なく恋しかつた。この人の妻は祖母の宮のお教えを受けていたといつても、まだよく心にはいらぬうちに父の家へ引き取られ、十三絃もはんぱな稽古^{けいこ}になつてしまったのであるから、良人^{おとと}の前では恥じて少しも弾かないのである。すべておおまかに外見をかまわず暮らしていて、あとへあとへ生まれる子供の世話に追われているのであるから、大将は若

い妻の感じのよさなどは少しも受け取りえない良人なのである。しかも嫉妬しつとはして、腹をたてなどする時に天真爛漫ちんまんな所に見える無邪気な夫人なのであった。

院は対のほうへお帰りになり、紫夫人はあとに残って女三の宮とお話などをして、明け方に去ったが、昼近くなるまで寢室を出なかった。

「宮は上手じょうずになられたようではありませんか。あの琴をどう聞きましたか」

と院は夫人へお話しかけになった。

「初めごろ、あちらでなさいますのを、聞いておりました時は、まだそうおできになるとは伺いませんでした。非常に御上達なさいまし

たね。ごもつともですわね、先生がそればかりに没頭していらっ
しやったのですものね」

「そうですね、手を取りながら教えるのだからこんな確かな教授法は
なかったわけですね。あなたにも教えるつもりでいたが、あれは面倒
で時間のかかる稽古ですからね、つい実行ができなかったのだが、院
の陛下も琴だけの稽古はさせているだろうと言っておられるというこ
とを聞くと、お気の毒で、せめてそれくらいのことは保護者選ばれ
たものの義務としてしなければならぬかという気になって、やり始
めた先生なのですよ」

などと仰せられるついでに、

「小さかったころのあなたを手もとへ置いて、理想的に育て上げたい

とは思ったものの、そのころの私にはひまな時間が少なく、特別なものの先生になってあげることもできなかったし、近年はまたいろいろなことが次から次へと私を駆使して、よく世話もしてあげなかった琴のできのよかったことで私は光栄を感じましたよ。大將が非常に感心しているのを見たこともうれしくてなりませんでしたよ」

ともおほめになった。そうした芸術的な能力も豊かである上に、今は一方で祖母の義務を御孫の宮たちのために忠実に尽くしていて、家庭の実務をとることに力不足は少しも見せない夫人であることを院は思いになり、こうまで完全な人というものは短命に終わるようなこともあるのであると、そんな不安をお覚えになった。多くの女性を御覧になった院が、これほどにも物の整った人は断じてほかにない

ときめておいでになる紫の女王であつた。夫人は今年が三十七であつた。同棲あそばされてからの長い時間を院は追懷あそばしながら、

「祈禱きとうのようなことを半生の年よりもたくさんさせて今年は無理をしないようにあなたは慎むのですね。私がそうしたことは常に氣をつけてさせなければならないのだが、ほかのことに紛れてうっかりとしている場合もあるだろうから、あなた自身で考えて、ああしたいというようないくぶん大きな仏事の催しでもあれば、言ってくればいくらでも用意をさせますよ。北山の僧都そうずがなくなっておしまいになつたことは惜しいことだ。親戚しんせきとせずに言つてもりっぱな宗教家でしたがね」

ともお言いになつた。また、

「私は生まれた初めからすでにたいそうに扱われる運命を持っていたし、今日になって得ている名誉も物質的のしあわせも珍しいほどの人間ともいつてよいが、また一方ではだれよりも多くの悲しみを見て来た人とも言えるのです。母や祖母と早く別れたことに始まって、いろいろな悲しいことが私のまわりにはありましたよ。それが罪業を軽くしたことになって、こうして思いのほか長生きもできるのだと思いますよ。あなたは私とあの別居時代のにがい経験をしてからはもう物思ひも煩悶はんもんもなかったろうと思われる。お后きさきと言われる人、ましてそれ以下の宮廷の人には人との競争意識でみずから苦しまない人はないのですよ。親の家にいるままのようにして今日まで来たあなたのような気楽はだれにもないものなのですよ。この点だけではあなたがだれよ

りも幸福だったということがわかりますか。思いがけなく姫宮をこちらへお迎えしなければならなかったからは、少しの不愉快はあるでしょうがね、それによって私の愛はいつそう深まっているのだが、あなたは自身のことだからわかっていないかもしれない。しかし物わかりのいい人だから理解してくるかもしれないと頼みにしていますよ」

と院がお言いになると、

「お言葉のように、ほかから見ますれば私としては過分な身の上になっっているのですが、心には悲しみばかりがふえてまいります。それを少なくしていただきたいと神仏にはただそれを私は祈っているのですよ」

言いたいことをおさえてこれだけを言った女王に貴女らしい美しさが見えた。

「ほんとうは私はもう長く生きていられない気がしているのでございますよ。この厄年^{やくどし}までもまだ知らない顔でこのままですことは悪いことと知っています。以前からお願ひしていることですから、許していただけたら尼になります」

とも夫人は言った。

「それはもつてのほかのことですよ。あなたが尼になってしまったあとの私の人生はどんなにつまらないものになるだろう。平凡に暮らしではいるようなものの、あなたと睦^{むつ}まじくして生きているということよりよいことはない。私は信じているのです。あなただけをどんなに

私が愛しているかということ、これからの長い時間に見ようと思つてください」

院がこうお言いになるのを、またもいつもの慰め言葉で自分の信仰にはいる道をおはばみになると聞いて、夫人の涙ぐんでいるのを院は憐れあわにお思いになつて、いろいろな話をし出して紛らせようとおつとめになるのであつた。

「そうおおぜいではありませんが、私の接触した比較的優秀な女性について言ってみると、女は何よりも性質が善良で落ち着いた考えのある人が一等だと思われるが、それがなかなか望んで見いだせないものなのです。大將の母とは少年時代に結婚をして、尊重すべき妻だとは思っていましたが、仲をよくすることができずに、隔てのあるまま

で終わったのを、今思うと気の毒で堪えられないし、残念なことをしたと後悔もしていながら、また自分だけが悪いのでもなかったと一方では考えられもするのですよ。りっぱな貴婦人であつたことは間違いないことで、なんらの欠点はなかったが、ただあまりに整然ととのつたのが堅い感じを受けさせてね。少し賢過ぎるといっていいような人で、話で聞けば頼もしいが、妻にしては面倒な氣のするというよ
ちゅうぐううな女性でしたよ。中宮の母君の御息所は、
みやすどころ高い見識の備わつた才女の例には思い出される人だが、恋人としてはきわめて扱いにくい性格でしたよ。怨むうらのが当然だと一通りは思われることでも、その人はそのままそのことを忘れずに思いつめて深く恨むのですから、相手は苦しくてならなかった。自己を高く評価させないではおかないという自

尊心が年じゅう付きまっわっているような気がして、そんな場合に自分
分は気に入らない男になるかもしれないと、あまりに見栄を張り過ぎ
るような私になって、そして自然に遠のいて縁が絶えたのですよ。私
が無二無三に進み寄ってあるまじい名の立つ結果を引き起こしたその
人の真価を知っているだけなお捨ててしまったのが済まないことに思
われて、せめて中宮にはよくお尽くししたいと、それも前生の約束
だったのでしょうが、こうして子にしてお世話を申していることで、
あの世からも私を見直しているでしょうよ。今も昔も浮わついた心か
ら人のために気の毒な結果を生むことの多い私ですよ」

なお幾人^{いくたり}かの女の上を院はお語りになった。

「女御^{にょご}のあの後見役はたいしたものではあるまいと軽く見てかかった

相手ですが、それが心の底の底までは見られないほどの深い所のある女でしたからね。うわべは素直らしく柔順には見えながら、自己を守る堅さが何かの場合に見える^{れいり}伶俐なたちなのですよ」

と院がお言いになると、

「ほかの方は見ないのですからわかりませんけれど、あの方にはおりおりお目にかかっています^{そうめい}が、聡明で聡明で御自身の感情を少しもお見せにならないのに比べて、だれにも友情を押しつける私をあの方はどう御覧になつていらつしやるかときまりが悪くてね。しかしとにもかくにも女御は私をいようにだけ解釈してくださるだろうと思つています」

夫人にとってはねたましく思われた人であつた^{あかし}明石夫人をさえこん

なに寛大な心で見えるようになったのも、女御を愛する心の深いからであらうと院はうれしく思召した。おほしめ

「あなたは恨む心もある人だが思いやりもあるから私をそう困らせませんね。たくさんな女の中であなたの真似まねのできる人はない。あまりにりっぱ過ぎるわけですね」

微笑して院はこうお言いになる。

夕方になってから、

「宮がよくお弾ひきになったお祝いを言つてあげよう」

と言つて、院は寝殿へお出かけになった。自分があるために苦しんでいる人がほかにあることなどは念頭になくて、お若々しく宮は琴の稽古けいこを夢中になつてしておいでになった。

「もう琴は休ませておやりなさい。それに先生をよく歓待なさらないで、苦しい骨折りのかいがあつて安心してよいで
きでしたよ」

と院はお言いになつて、楽器は押しやつて寝ておしまいになつた。

対のほうでは寢殿泊まりのこうした晩の習慣で女王は長く起きてい

て女房たちに小説を読ませて聞いたりしていた。人生を写した小説の

中にも多情な男、幾人も恋人を作る人を相手に持つて、絶えず煩悶す

る女が書かれてあつても、しまいには二人だけの落ち着いた生活が営

まれることに皆なつてゐるようであるが、自分はどうかろう、晩年に

なつてまで一人の妻にはなれずにゐるではないか、院のお言葉のよう

に自分は運命に恵まれてゐるのかもしれないが、だれも最も堪えがたい

こととする苦痛に一生付きまとわれていなければならぬのであろうか、情けないことであるなどと思い続けて、夫人は夜がふけてから寝室へはいったのであるが、夜明け方から病になつて、はなはだしく胸が痛んだ。女房が心配して院へ申し上げようと言つてゐるのを、

「そんなことをしては済みませんよ」

と夫人はとめて、非常な苦痛を忍んで朝を待った。発熱までもして夫人の容体は悪いのであるが、院が早くお歸りにならないのをお促しすることもなしにゐるうち、女御のほうから夫人へ手紙を持たせて来た使いに、病氣のことを女房が伝えたために、驚いた女御から院へお知らせをしたために、胸を騒がせながら院が歸つておいでになると、夫人は苦しそうなふうで寝ていた。

「どんな気持ちですか」

とお言いになり、手を夜着の下に入れてごらんになると非常に夫人の身体は熱い。昨日話し合われた厄年のことも思われて、院は恐ろしく思召されるのであつた。粥^{かゆ}などを作つて持つて来たが夫人は見るにとすらもいやがつた。院は終日病床にお付き添いになつて看護をしておいでになつた。ちよつとした菓子なども口にせず起き上がらないまま幾日かたつた。どうなることかと院は御心配になつて祈祷^{きとう}を数知らずお始めさせになつた。僧を呼び寄せて加持^{かじ}などもさせておいでになつた。どこが特に悪いともなく夫人は非常に苦しがるのである。胸の痛みの時々起こるおりなども堪えがたそうな苦しみが見えた。いろいろな養生^{ようじょう}もまじないもするがききめは見えない。重い病氣をしてい

ても時さえたてばなおる見込みのあるのは頼もしいが、この病人は心細くばかり見えるのを院は悲しがつておいでになった。もうほかのこ
とをお考えになる余裕がないために、法皇の賀のことも中止の状態に
なった。法皇の御寺みでらから夫人の病をねんごろにお見舞いになる御使
いがたびたび来た。

夫人の病気は同じ状態のまま二月も終わった。院は言い尽くせぬ
ほどの心痛をしておいでになって、試みに場所を変えさせたらとお考
えになって、二条の院へ病女王をお移しになった。六条院の人々は皆
大厄難やくなんが来たように、悲しんでいる。冷泉院れいぜいも御心痛あそばされた。

この夫人にもしものことがあれば六条院は必ず出家を遂げられるであ
ろうことは予想されることであつたから、大将なども誠心誠意夫人の

病氣回復をはかるために奔走しているのであった。院が仰せられる祈^{きと}禱^うのほかには、大将は自身の志での祈禱もさせていた。少し知覚の働く時などに夫人は、

「お願いしていますことをあなたは拒^{こば}みになるのですもの」

と、院をお恨みした。力の及ばぬ死別にあうことよりも、生きながら自分から遠く離れて行かせるようなことを見ては、片時も生きるに堪えない気があそばされる院は、

「昔から私のほうが出家のあこがれを多く持っていたながら、あなたが取り残されて寂しく暮らすことを思うのは、堪えられないことなので、こうしてまだ俗世界に残っているのに、逆にあなたが私を捨てようと思うのですか」

こんなばかりお言いになつて御同意をあそばされないのが悪いのか、夫人の病体は頼み少なく衰弱していった。もう臨終かと思われることも多いためにまた尼にさせようかとも院はお惑いになるのであった。こんなことで女三によさんの宮みやのほうへは仮の訪問すらあそばされなかった。どこでも楽器はしまい込まれて、六条院の人々は皆二条のほうへ集まつて行つた。このお邸やしきは火の消えたようであつた。ただ夫人たちだけが残っているのであるが、これを見れば六条院のはなやかさは紫の女王一人のために現出されていたことのように思われた。女御も二条の院のほうへ来て御父子で看護をされた。

「あなたは普通のお身体からだでないのですから、物怪もののけの徘徊はいかいする私の病室などにはおいでにならないで、早く御所へお帰りなさいね」

と、病苦の中でも夫人は心配して言うのであった。若宮のおかわいらしいのを見ても夫人は非常に泣くのであった。

「大きくおなりになるのを拝見できないのが悲しい。お忘れになるでしょう」

などと言うのを聞く女御も悲しかった。

「そんな縁起でもないことを思っではいけませんよ。悪いようでもそんなことにはならないだろうと思う自身の性格で運命も支配していくことになりますからね。狭い心を持つ者は出世をしても寛大な気持ちでいられないものだから失敗する。善良な、おおような人は自然に長命を得ることになる例もたくさんあるのだから、あなたなどにそんな悲しいことは起こってきませんよ」

などと院はお慰めになるのであった。神仏にも夫人の善良さ、罪の軽さを告げて目に見えぬ加護を祈らせておいでになるのである。修法しゅほうをする阿闍梨あじりたち、夜居よいの僧などは院の御心痛のはなはだしさを拝見することの心苦しさに一心をこめて皆祈った。少し快い日が間に五、六日あつて、また悪いというような容体で、幾月も夫人は病床を離れることができなかったから、やはり助かりがたい命なのかと院はお歎なげきになった。物怪もののけで人に移されて現われるものもない。どこが悪いということもなくて日に添えて夫人は衰弱していくのであったから、院は悲しくばかり思召おぼしめされて、いっさいほかのことはお思いになれなかった。

あの衛門督えもんのかみは中納言になっていた。衛門督の官も兼ねたままであ

る。当代の天子の御信任を受けてはなやかな勢力のついてくるにつけても、失恋の苦を忘れかねて、女三の宮の姉君の二の宮と結婚をした。これは低い更衣腹の内親王であつたから、心安い気がして格別の尊敬を妻に払う必要もないと思つて、院からお引き受けをしたのである。普通の人に比べてはすぐれた女性ではおありになつたが初めから心に沁しんだ人に変えるだけの愛情は衛門督に起こらなかつた。ただ人目に不都合でないだけの良人おっとの義務を尽くしているに過ぎないのであつた。今も以前の恋の続きにその方のことを聞き出す道具に使つてゐる女三の宮の小侍従という女は、宮の侍従の乳母めのとの娘なのである。その乳母の姉が衛門督の乳母であつたから、この人は少年のころから宮のお噂うわさを聞いていた。お美しいこと、父帝が溺愛できあいしておいでになる

ことなどを始終聞かされていたのがこの恋の萌芽きざしになったのである。

六条院が病夫人と二条の院へお移りになっていて、ひまであろうことを思つて小侍従を衛門督は自邸へ迎えて、熱心に話すのはまたそのことについてであつた。

「昔から命にもかかわるほどの恋をしていて、しかも都合のよいあなたという手蔓てづるを持つていて、宮様の御様子も聞くことができ、私の煩悶はんもんしていることも相当にお伝えしてもらっているはずなのだが、少しも見るに足る効果がないから残念でならない。あなたが恨めしくなるよ。法皇様さえも、宮様が幾人もの妻の中の一人におなりになつて、第一の愛妻はほかの方であるというわけで、一人お寝やすみになる夜が多く、つれづれに暮らしておいでになるのをお聞きになつて、御後悔を

あそばしたふうで、結婚をさせるのであつたら普通人の忠実な良人をおつと宮のために選ぶべきだつたとお言いになり、女二によにの宮はかえつて幸福で将来が頼もしく見えるではないかと仰せられたということを私は聞いて、お気の毒にも、残念にも思つて煩悶しないではいられないではないか。私の宮さんも御姉妹きようだいではあるが、それはそれだけの方としておくのだよ」

と衛門督えもんのかみ たんそくが歎息をしてみせると、小侍従は、

「まあもつたいない。それはそれとしてお置きになつて、また何をどうしようというのでしょうか」

ととがめた。衛門督は微笑を見せて、

「まあ世の中のこととは皆そうしたもので、表も裏もあるものなのだ

よ。私が三の宮さんの熱心な求婚者であつたことは、法皇様も陛下もよく御承知で、陛下はその時代に十分見込みはありそうだよ、とも仰せられたものなのだが、もう少しの御好意が不足していたわけだと私は思っている」

などと言う。

「それはだめですよ。むずかしいことですよ。運命もありますし、六条院様が求婚者になつて現われておいでになつては、どの競争者だつて勝ち味はないと思いますけれど、あなただけはたいへんな御自信があつたのですね。近ごろになりましたこそ御官服の色が濃くおなりになつたようでございますがね」

こんなふうにくまし立てる小侍従の攻撃にはかなわないことを衛門

督は思った。

「もう昔のことは言わないよ。ただね、このごろのようなまたとない好機会にせめてお居間の近くへまで行って、私の苦しんでいる心を少しでもお話しさせてくれることを計らってくれないか。もつたいない欲念よくねんなどは見ていてごらん、もういつさい起こさないことにあきらめているのだから、いいだろう」

「それ以上のもつたいない欲心がありますかしら。恐ろしい望みをお起こしになったものですね、私は出てまいらなければよかった」

強硬に小侍従は拒む。

「ひどいことを言うものではないよ。たいそうらしく何を言うのだ。后といっても恋愛問題がかつてお起こしになった人もないわけではな

いよ。まして宮中のことではなしさ、ほかからは結構なお身の上に見られておいでになっても、口惜くちおしいこともあれでは多かろうじゃないか。法皇様からはどのお子様よりも大事がられて御成人なすって、今は同じだけの御身分でない方と同等の一人の夫人で、しかも最愛の方としてはお扱われにならないというくわしいことを私は知っているのだよ。人は無常の世界にいるのだから、君が宮の御幸福をこうして守ろうとしていることが皆むだなことになるかもしれないからね。私に冷酷なことを言っておかないほうがいいよ」

「人ほど大事がられない奥様だとお言いになって、それをあなたの力でよくしていただけるといいますか。六条院様と宮様は普通の夫婦というのでもありませんよ。保護者もなく一人でおいでになりますよ

おぼしめ

りはという思召しで親代わりにお頼みになったのですもの。院がお引き受けになりましたのもその気持ちでなすったことですもの、つまりないことを言つて、結局は宮様を悪くあなたはおつしやるのですね」

ついには腹をたててしまった小侍従の機嫌きげんを衛門督えもんのかみはとつていた。

「ほんとうのことを言えば、あのまれな美貌びぼうの六条院様を良人おとこにお持

ちになる宮様に、お目にかかつて自身が好意を持たれようとは考えても何もいないのだよ。ただ一言を物越しに私がお話しするだけのことで、宮様の尊厳をそこねることはないじゃないか。神や仏にでも思っていることを言つて咎とがや罰を受けはしないじゃないか」

こう言つて衛門督は絶対に不浄なことは行なわないという誓いまでも立てて、ひそかに御訪問をするだけの手引きを頼むのを、初めのう

ちは強硬にあるまじいことであると小侍従は突きはねていたが、もともとあさはかな若い女房であるから、こうまでも思い込むものかと、熱心な頼みに動かされて、

「もしそんなことによいような隙すきが見つかりましたら御案内いたしましょう。院がおいでにならぬ晩はお几帳きちようのまわりに女房がたくさんいます。お帳台には必ずだれかが一人お付きしているのですから、どんな時にそうしたよいおりがあるものでしょうかね」

と困ったように言いながら小侍従は帰って行つた。

どうだろう、どうだろうと毎日のように衛門督から責めて来られる小侍従は困りながらしまいにある隙すきのある日を見つけて衛門督へ知らせてやった。督は喜びながら目だたぬふうを作つて小侍従を訪ねたずて

行つた。衛門督自身もこの行動の正しくないことは知っているのであるが、物越しの御様子に触れては物思いがいつそうつのるはずの明日までは考えずに、ただほのかに宮のお召し物の^{つまさき}褌先の重なりを見るにすぎなかつたかつての春の夕べばかりを幻に見る心を慰めるためには、接近して行つて自身の胸中をお伝えして、それから^{ふみ}一行の文のお返事を得ることにもなればというほどの考えで、宮が^{あわれ}憐んでくださるかもしれぬというはかない希望をいだいている衛門督でしかなかつた。これは四月十幾日のことである。明日は^{かも}賀茂の齋院の^{みそぎ}御禊のある日で、御姉妹^{きょうだい}の齋院のために儀装車に乗せてお出しになる十二人の女房があつて、その選にあつた若い女房とか、童女とかが、縫い物をしたり、化粧をしたりしている一方では、自身らどうして明日の見物

に出ようとする者もあつて、仕度したくに大騒ぎをしていて、宮のお居間のほうにいる女房の少ない時で、おそばにいるはずの按察使あぜちの君も時々通つて来る源中將が無理に部屋のほうへ呼び寄せたので、この小侍だけがお付きしているのであつた。よいおりであると思つて、静かに小侍はお帳台の中の東の端へ衛門督の席を作つてやつた。これは乱暴な計らいである。宮は何心もなく寝ておいでになつたのであるが、男が近づいて来た気配けはいをお感じになつて、院がおいでになつたのかとお思ひになると、その男はかしこまった様子を見せて、帳台の床の上から宮を下へ抱きおろそうとしたから、夢の中でもものに襲われているのかとお思ひになつて、しいてその者を見ようとあそばすと、それは男であるが院とは違つた男であつた。これまで聞いたこともおありに

ならぬような話を、その男はくどくどと語った。宮は気味悪くお思ひ
になって、女房をお呼びになつたが、お居間にはだれもいなかったか
らお声を聞きつけて寄つて来る者もない。宮はお慄い出しふるになつて、
水のような冷たい汗もお身体からだに流しておいでになる。失心したような
この姿が非常に御可憐かれんであつた。

「私はつまらぬ者ですが、それほどお憎まれするのが至当だとは思わ
れません。昔からもつたいたない恋を私はいだいておりましたが、結局
そのままにしておけば闇やみの中で始末もできたのですが、あなた様をお
望み申すことを発言いたしましたために、院のお耳にはいり、その際
はもつてのほかのこととも院は仰せられませんでした。それも私の地
位の低さにあなた様を他へお渡しする結果になりました時、私の心に

受けました打撃はどんなに大きかったでしょう。もうただ今になって
はかいのないことを知っておりまして、こうした行動に出ますことは
慎んでいたのですが、どれほどこの失恋の悲しみは私の心に深く食い
入っていたのか、年月がたてばたつほど口惜くちおしく恨めしい思いがつ
のつていくばかりで、恐ろしいことも考えるようになりました。また
あなた様を思う心もそれとともに深くなるばかりでございました。私
はもう感情を抑制することができなくなりました、こんな恥ずかしい
姿であるまじい所へもまいりましたが、一方では非常に思いやりのな
いことを自責しているのですから、これ以上の無礼はいたしません」
こんな言葉をお聞きになることによって、宮は衛門督えもんのかみであることを
お悟りになった。非常に不愉快にお感じにもなったし、怖ろしくもま

おぼしめ
た思召されもして少しのお返辞もあそばさない。

「あなた様がこうした冷ややかなお扱いをなさいますのはごもつとでもですが、しかしこんなことは世間に例のないことではないのでございますよ。あまりに御同情の欠けたふうをお見せになれば、私は情けなさに取り乱してどんなことをするかもしれません。かわいそうだとだけ言ってください。そのお言葉を聞いて私は立ち去ります」

とも、手を変え品を変え宮のお心を動かそうとして説く衛門督であつた。想像しただけでは非常な尊厳さが御身を包んでいて、目前で恋の言葉などは申し上げられないもののように思われ、熱情の一端だけをお知らせし、その他の無礼を犯すことなどは思いも寄らぬことにしていた督であつたにかかわらず、それほど高貴な女性とも思われな

い、たぐいもない柔らかさと可憐な美しさ^{かれん}がすべてであるような方を
目に見てからは、衛門督の欲望はおさえられぬものになり、どこへで
も宮を盗み出して行つて夫婦になり、自分もそれとともに世間を捨て
よう、世間から捨てられてもよいと思うようになった。

少し眠つたかと思うと衛門督は夢に自分の愛している猫^{ねこ}の鳴いてい
る声を聞いた。それは宮へお返ししようと思つてつれて来ていたので
あつたことを思い出して、よけいなことをしたものだと思つた時に目
がさめた。この時にはじめて衛門督は自身の行為を悟つたのである。
が宮はあさましい過失をして罪に墮^おちたことで悲しみにおぼれておい
でになるのを見て、

「こうなりましたことによりまして、前生の縁がどんなに深かった

かを悟ってくださいませ。私の犯した罪ですが、私自身も知らぬ力がさせたのです」

不意に猫が端を引き上げた御簾みすの中に宮のおいでになった春の夕べのことも衛門督えもんのかみは言い出した。そんなことがこの悲しい罪に墮おちる因をなしたのかと思召おぼしめすと、宮は御自身の運命を悲しくばかり思召されるのであった。もう六条院にはお目にかかれなことをしてしまった自分であると思ひになることは、非常に悲しく心細くて、子供らしくお泣きになるのを、もったいなくも憐あわれにも思つて、自分の悲しみと同時に恋人の悲しむのを見るのは堪えがたい気のする督であつた。夜が明けていきそうなのであるが、帰って行けそうにも男は思われな

い。

「どうすればよいのでしょうか。私を非常にお憎みになっ
ていますか
ら、もうこれきり逢^あつてくださらないことも想像されますが、ただ一
言を聞かせてくださいませんか」

宮はいろいろとこの男からお言われになるのもうるさく、苦しく
て、ものなどは言おうとしてもお口へ出ない。

「何だか気味が悪くさえなりましたよ。こんな間柄というものがある
でしょうか」

男は恨めしいふうである。

「私のお願いすることはだめなのでしよう。私は自殺してもいい気
に
もとからなっているのですが、やはりあなたに心が残って生きていま
したものの、もうこれで今夜限りで死ぬ命になったかと思えますと、

多少の悲しみはございますよ。少しでも私を愛してくださいさるお心がで
きましたら、これに命を代えるのだと満足して死ねます」

と言つて、衛門督は宮をお抱きして帳台を出た。隅すみの室まの屏風びょうぶを引
きひろ拵かげ陰を作つておいて、妻戸をあけると、渡殿わたどのの南の戸がまだ昨夜
はいった時のままにあいてあるのを見つけ、渡殿の一室へ宮をおおろ
しした。まだ外は夜明け前のうす闇やみであつたが、ほのかに顔を見よ
うとする心で、静かに格子をあげた。

「あまりにあなたが冷淡でいらつしやるために、私の常識というものは
すっかりなくされてしまいました。少し落ち着かせてやろうと思召
すのでしたら、かわいそうだとだけのお言葉をかけてください」

衛門督が威嚇いかくするように言うのを、宮は無礼だと思ひになつて、

何かとがめる言葉を口から出したく思召したが、ただ慄ふるえられるばかりで、どこまでも少女らしいお姿と見えた。ずんずん明るくなっている。あわただしい気になっっているが、男は、

「理由のありそうな夢の話も申し上げたかったですけれど、あくまで私をお憎みになりますのもお恨めしくてよしますが、どんなに深い因縁のある二人であるかをお悟りになることもあなたにあるでしょう」

と言つて出て行こうとする男の気持ちに、この初夏の朝も秋のもの悲しさに過ぎたものが覚えられた。

おきて行く空も知られぬ明けぐれにいつくの露のかかる袖そでなり

宮のお袖を引いて督かみのこう言つた時、宮のお心はいよいよ歸つて行きそうな様子に樂になつて、

あけぐれの空にうき身は消えなん夢なりけりと見てもやむべく

とはかなそうにお言いになる声も、若々しく美しいのを聞きさしたままのようにして、出て行く男は魂だけ離れてあとに残るもののような気がした。

夫人の宮の所へは行かずに、父の太政大臣家へそつと衛門督えもんのかみは来たのであつた。夢と言つてよいほどのはかない逢う瀬が、なおありうることとは思えないとともに、夢の中に見た猫の姿も恋しく思い出され

た。大きな過失を自分はしてしまったものである。生きていることがまぶしく思われる自分になったと恐ろしく、恥ずかしく思つて、督はずつとそのまま家に引きこもつていた。

恋人の宮のためにも済まないことであるし、自身としてもやましい罪人になつてしまったことは取り返しのかぬことであると思うと、自由に外へ出て行つてよい自分とは思われなかつたのである。陛下の寵姫を盗み^{ちようき}たてまつるようなことをしても、これほどの熱情で愛している相手であつたなら、処罰を快く受けるだけで、このやましさはないはずである。そうした咎^{とが}は受けないであろうが、六条院が憎悪^{ぞうお}の目で自分を御覧になることを想像することは非常な恐ろしい、恥ずかしいことであると衛門督は思つていた。

貴女きじよと言つても少し蓮葉はすつばな心が内にあつて、表面が才女らしくもあり、

無邪気でもあるような見かけとは違つた人は誘惑にもかかりやすく、無理な恋の会合を相手としめし合わせてすることにもなりやすい

のであるが、女三によさんの宮みやは深さもないお心ではあるが、臆病おくびよう一方な性質

から、もう秘密を人に発見されてしまったようにも恐ろしがりもし、

恥じもしておいでになつて、明るいほうへいざつて出ることすらおできにならぬまでになつておいでになつて、悲しい運命を負つた自分であるともお悟りになつたであらうと思われる。宮が御病氣のようであるという知らせをお受けになつて、六条院は、はなはだしく悲しんでおいでになる夫人の病氣のほかにも、またそうした心痛すべきことが起こつたかと驚いて見舞いにおいでになつたが、宮は別にどこがお悪い

というふうにも見えなかった。ただ非常に恥ずかしそうにして、そしてめいっておいでになった。院のお目を避けるようにばかりして、下を向いておいでになるのを、久しく訪ね^{たず}なかつた自分を恨めしく思っているのであらうと、院のお目にそれが憐れ^{あわ}にも、いたいたいようにも映つて、紫夫人の容体などをお話しになり、

「もうだめになるのでしょうか。最後になつて冷淡に思わせてやりたくないと考えるものですから付いていつているのですよ。少女時代から始終そばに置いて世話をした妻ですから、捨てておけない気もして、こんなに幾月もほかのことは放擲^{ほうてき}したふうで付ききりで看護もしていますが、またその時期が来ればあなたによく思つてもらえる私になるでしょう」

などとお言いになるのを、宮は聞いておいでになって、あの罪は氣
ぶりにもご存じないことを、お氣の毒なことのようにも、濟まないこ
とのようにもお思いになって、人知れず泣きたい氣持ちでおいでに
なつた。

衛門督の恋はあのことがあつて以来、ますますつのるばかりで、は
げしい煩悶はんもんを日夜していた。賀茂祭りの日などは見物に出る公達きんだちがお
おぜいで来て誘い出そうとするのであつたが、病氣であるように見せ
て寢室を出ずに物思ひを続けていた。夫人の女二にょにの宮には敬意を払う
ふうに見せながらも、打ち解けた良人おとこらしい愛は見せないのである。
督は夫人の宮のそばでつれづれな時間をつぶしながらも心細く世の中
を思っているのであつた。童女が持っている葵あおいを見て、

悔しくもつみをかしける葵草神の許せる挿頭ならぬに

こんな歌が口ずさまれた。後悔とともに恋の炎はますます立ちぼるようなわけである。町々から聞こえてくる見物車の音も遠い世界のこのようなに聞きながら、退屈に苦しんでもいたのであった。女二の宮も衛門督の態度の誠意のなさを感じになって、それは何がどうとおわかりにならないのであるが、御自尊心が傷つけられているように、物思わしくばかり思召された。女房などは皆祭りの見物に出て人少なな昼に、寂しそうな表情をあそばして十三絃の琴を、なつかしい音に弾いておいでになる宮は、さすがに高貴な方らしいお美しさと艶な趣は備わってお見えになるのであるが、ただもう少しの運が足りな

かつたのだと衛門督は自身のことを思っていた。

もろかづら落ち葉を何に拾ひけん名は睦まじき挿頭むつ かざしなれども

こんな歌をむだ書きにしていた。もったいないことである。

院はまれにお訪たずねになった宮の所からすぐに帰ることを気の毒に思いになり、泊まっておいでになったが、病夫人を気づかわしくばかり思っておいでになる所へ使いが来て、急に息が絶えたと知らせた。院はいつさいの世界が暗くなったようなお気持ちで二条の院へ帰ってお行きになるのであったが、車の速度さえもどかしく思っておいでになると、二条の院に近い大路はもう立ち騒ぐ人で満たされていた。邸

内からは泣き声が多く聞こえて、大きな不祥事のあることは覆い^{おお}がたく見えた。夢中で家へおはいりになったが、

「この二、三日は少しお快いようでしたのに、にわかに絶息をあそばしたのでございます」

こんな報告をした女房らが、自分たちも、いっしよに死なせてほしいと泣きむせぶ様子も悲しかった。もう祈^{きとう}禱の壇は壊^{こぼ}たれて、僧たちもきわめて親しい人たちだけが残ってもそのほかのは仕事じまいをして出て行くのに忙しいふうを見せている。こうしてもう最愛の妻の命は人力も法力も施しがたい終わりになったのかと、院はたとえばような悲しみをお覚えになった。

「しかしこれは物怪^{もののけ}の所業だろうと思われる。あまりに取り乱して泣

くものでない」

と院は泣く女房たちを制して、またまた幾つかの大願をお立てになった。そしてすぐれた修験の僧をお集めになり、

「これが定^きまった命数でも、しばらくその期をゆるめていただきたい、不動尊は人の終わりにしばらく命を返す約束を衆生にしてください。それに自分たちはおすがりする。それだけの命なりとも夫人にお授けください」

こう僧たちは言つて、頭から黒煙を立てると言われるとおりの熱誠をこめて祈っていた。院も互いにただ一目だけ見合^あわす瞬間が与えられたい、最後の時に見合^あわせることのできなかつた残念さ悲しさから長く救われたいと言つてお歎^{なげ}きになる御様子を見ては、とうていこの

夫人のあとにお生き残りになることはむずかしкаろうと思われて、そのことをまた人々の歎くことも想像するにかたくない。

この院の夫人への大きな愛が御仏みほとけを動かしたのか、これまで少しも現われてこなかった物怪が、小さい子供に憑のりつて来て、大声を出し始めたのと同時に夫人の呼吸いきは通つてきた。院はうれしくも思召され、また不安でならぬようにも思召された。物怪は僧たちにおさえられながら言う、

「皆ここから遠慮をするがよい。院お一人のお耳へ申し上げたいことがある。私の霊を長く法力で苦しめておいでになったのが無情な恨めしいことですから、懲らしめを見せようと思いましたが、さすがに御自身の命も危険なことになるまで悲しまれるのを見ては、今こそ私は

物怪であっても、昔の恋が残っているために出て来る私なのですから、あなたの悲しみは見過ぎてせないで姿を現わしました。私は姿など見せたくなかったのだけれど」

と物怪は叫んだ。髪を顔に振りかけて泣く様子は、昔一度御覧になった覚えのある物怪であった。その当時と同じ無気味さがお心に湧いてくるのも恐ろしい前兆のように思われになって、その子供の手を院はお捉えとらになつて、前へおすわらせになり、あさましい姿はできるだけ人に見させまいとお努めになつた。

「ほんとうにその人なのか。悪い狐きつねなどが故人を傷つけるためにでたらめを言ってくることがあるから、確かなことを言うがいい。他人の知らぬことで私にだけ合点のゆくことを何か言ってみるがいい。そう

すれば少しは信じてもいい」

院がこうお言いになると、物怪はほろほろと涙を流しながら、悲しそうに泣いた。

「わが身こそあらぬさまなれそれながら空おぼれする君は君なり

恨めしい、恨めしい」

と泣き叫びながらもさすがに羞恥しゅうちを見せるふうが昔の物怪に違う所もなかった。嘘うそでないことからかえってうとましい気がよけいにして情けなくお思われになるので、ものを多く言わすまいと院はされた。

「中宮ちゅうぐうに尽くしてくださいますことはうれしい、ありがたいこととは

あの世からも見ておりますが、あの世界の人になつては子の愛というものを以前ほど深くは感じないのですか、恨めしいとお思いしたあなたへの執着だけがこんなふうにもなつて残つています。その恨みの中でも、生きていますところにほかの人よりも軽くお扱いになつたことよりも、夫婦のお話の中で私を悪くお言いになつたことが私をくやしくさせました。もう私は死んでいるのですから、私が悪くつてもあなたはよくとりなして言つてくださつていいではありませんか。そうお恨みしただけで、こんな身になつていますと大形な表示にもなつたのでおおぎようす。奥様を深く恨んでいませんが、法の護りまもが強くて近づけないので反抗してみただけです。あなたのお声もほのかに承ることができましたからもういいのです。私の罪の軽くなるような方法を講じてくださ

い。修法、読經どきやうの聲は私にとって苦しい焰ほのおになってまつわってくるだけ
です。尊い仏の慈悲の聲に接したいのですが、それを聞くことので
きないのは悲しゅうございます。中宮にもこのことをお話しくださ
いませ。後宮の生活をするうちに人を嫉妬しつとするような心を起こしてはな
らない、齋宮をお勤めになった間の罪を御仏みほとけに許していただけるだけ
の善根を必ずなさい、あの世で苦しむことをよく考えなければならな
いとね」

などと言うが、物怪に向かってお話しになることもきまり悪くお思
いになって、物怪がまた出ぬように法の力で封じこめておいて、病夫
人を他の室へお移しになった。

紫夫人が死んだという噂うわさがもう世間に伝わって弔詞くやみを述べに来る人

たちのあるのを不吉なことに院はお思いになった。今日の祭りの帰りの行列を見物に出ていた高官たちが、帰宅する途中でその噂を聞いて、

「たいへんなことだ。生きがいのあった幸福な女性が光を隠される日だから小雨も降り出したのだ」

などと解釈を下す人もあった。また、

「あまりに何もかもそろった人というものは短命なものなのだ。『何をさくらに』（待てといふに散らでしとまるものならば何を桜に思ひまさまし）」という歌のように、そうした人が長生きしておれば、一方で不幸に甘んじていなければならぬ人も多くできるわけだ。二品の宮が院の御寵愛を一身にお集めになる日もこれで来るだろう。あまりに

ちようあい

お気の毒なふうだったからね」

などとも言ふ人があつた。衛門督^{えもんのかみ}は引きこもっていた昨日の退屈さに懲りて今日は弟の左大弁、参議などの車の奥に乗って見物に出ていた町で、人の言い合っている噂が耳にはいった時に、この人は一種変わった胸騒ぎがした。「散ればこそいとど桜はめでたけれ」（何か浮き世に久しかるべき）などとも口ずさみながら同車の人々とともに二条の院へ参つた。まだ確かでないことであるから、形式を病氣見舞いにして行つたのであるが、女房の泣き騒いでいる時であつたから、真実であつたかとさらに驚かれた。ちやうど式部卿の宮がお駈^かけつけになつた時で、萎^{しお}れたふうで宮は内へおはいりになつた。押し寄せて来た多数の見舞い客の挨拶^{あいさつ}はまだことごとくは取り次ぎきれずに、家従

たちの忙しがっている所へ左大將が涙をふきながら出て来た。

「どんなふうでいらっしゃるのですか。不吉なことを言う人があるのを私たちは信じることができないで伺ったのです。ただ長い御疾患を御心配申し上げて参ったのです」

などと衛門督は言った。

「重態のままで長く病んでおられたのですが、今朝の夜明けに絶息されたのは、それは物怪もののけのせいだったのです。ようやく呼吸いきが通うようになったと言つて皆一安心しましたが、まだ頼もしくは思われないのですからね。気の毒でね」

と言う大將には実際今まで泣き続けていたという様子が残っていた。目も少しは腫はれていた。衛門督は自身のだいそれた心から、大將

が親しむこともなかった継母のことでこうまで悲しむのは不思議なことであると目をつけた。こんなふうには高官らも見舞いに集まって来たことをお聞きになって、院からの御挨拶が伝えられた。

「重い病人に急変が来たように見えましたために女房らが泣き騒ぎをいたしましたので、私自身もつい心の平静をなくしているおりからですから、またほかの日に改めて御好意に対するお礼を申しましょう」

院のお言葉というだけで、もう衛門督えもんのかみの胸は騒ぎ立っていたのである。こうした混雑紛れでなくては自分の来られない場所であることを知っているのであるから腹ぎたないふるまいである。

蘇生そせいしたのちをまだ恐ろしいことに院はお願いになって、夫人のためにもろもろの法力の加護をお求めになった。生霊いきりようで現われた時さえ

も恐ろしかった物怪が、今度は死霊になっているのであるから、宗教画に描かれてある恐ろしい形相も想像されて、気味悪く、情けなく思召された院は、中宮のお世話をされることもこの時だけは気の進まぬことに思召されたが、しかしその人には限らず女というものは皆同じように、人間の深い罪の原因^{もと}を作るものであるから、人生のすべてがいやなものに思われるとお考えになり、あれは他人がだれも聞かぬ夫婦の間の話の中にただ少し言ったことに過ぎなかったのにと、そんなことを思い出しになると、いよいよ愛欲世界がうるさくお考えられるのであるであつた。ぜひ尼になりたいと夫人が望むので、頭の頂の髪を少し取って、五戒だけをお受けさせになった。戒師が完全に仏の戒めを守る誓いを、仏前で尊い言葉で述べる時に、院は体面もお忘れに

なり、夫人に寄り添って涙を拭ぬぐいつつ夫人とともに仏を念じておいでになったのを見ると、聡明そうめいな貴人も御愛妻の病に仏へおすがりになる心は凡人に変わらないことがわかった。どんな方法を講じて夫人の病を救い、長く生命いのちを保たせようかと夜昼お歎なげきになるために、院のお顔にも少し痩やせが見えるようになった。五月などはまして氣候が悪くて病夫人の容体がさわやいでいくとも見えなかったが、以前よりは少しいいようであつた。しかもまだ苦しい日々が時々夫人にあつた。院は物怪の罪を救うために、日ごとに法華經ほけきよう一卷ずつを供養させておいでになった。そのほか何かと宗教的な営みを多くあそばされた。病床のかたわらで不斷の読經じききようもさせておいでになるのであつて、声のいい僧を選んでそれにはあてておありになった。一度現われて以来おりお

り出て物怪は悲しそうなことを言うのであつて、全然退いては行かないのである。暑い夏の日になっていよいよ病夫人の衰弱ははげしくなるばかりであるのを院は歎き続けておいでになった。病に弱つていながらも院のこの御様子を夫人は心苦しく思い、自分の死ぬことは何でもないがこんなにお悲しみになるのを知りながら死んでしまうのは思ひやりのないことであろうから、その点で自分はまだ生きるように努めねばならぬと、こんな気が起つたころから、米湯おもゆなども少しずつは取ることになったせいか、六月になつてからは時々頭を上げて見ることもできるようになった。珍しくうれしくお思ひになりながら、なお院は御不安で六条院へかりそめに行つて御覧になることもなかった。

姫宮はあの事件があつてから煩悶はんもんを続けておいでになるうちに、お身体からだが常態でなくなつて行つた。御病氣のようにお見えになるが、それほどたいしたことではないのである。六月になつてからはお食欲しょくよくが減退してお顔色も悪くおやつれが見えるようになった。衛門督は思いあまる時々夢のように忍んで来た。宮のお心には今も愛情が生じているのではおありにならないのである。罪をお恐れになるばかりでなく、風采ふうさいも地位もそれはこれに匹敵する価値のない人であることはむしろんであつたし、氣どつて風流男がる表面を見て、一般人からは好ましい美男という評判は受けていても、少女時代から光源氏を良人おととに与えられておいでになつた宮が、比較して御覧になつては、それほど価値に思われる顔でもないのであるから、無礼者であるという御意識以

外の何ものもない相手のために、妊娠をあそばされたというのはお気の毒な宿命である。気のついた乳母^{めのと}たちは、

「たまにしかおいでにならないで、そしてまたこんなふうに重荷を宮様へお負わせになる」

と院をお恨みしていた。寝^{やす}んでおいでになることをお知りになつて、院は訪^{たず}ねようとあそばされた。

夫人は暑い時分を清くしていいたいと思い、髪を洗ってやや爽快^{そうかい}なふうになつていた。そしてそのまままた横になつていたのであるから、早くかわかず、まだぬれている髪は少しのもつれもなく清らかにゆらゆらと、病む麗人に添つていた。青みを帯びた白い顔は美しくてすきとおるような皮膚つきである。虫のもぬけのようにたよりない。しか

も長く捨てて置かれた二条の院は女王の美の輝きで狭げにさえ見えた。昨日今日になって人ごちが夫人に帰ってきたことによつて院内が活気づいてにわかに流れも木草も繕われだした。そうした庭をながめても、それが夏の終わりの景色であるのに病臥びようがしていた間の月日の長さが思われた。池は涼しそうで蓮はすの花が多く咲き、蓮葉は青々として露がきらきら玉のように光っているのを、院が、

「あれを御覧なさい。自分だけが爽快がつている露のようじゃありませんか」

とお言いになるので、夫人は起き上がって、さらに庭を見た。こんな姿を見ることが珍しくて、

「こうしてあなたを見ることのできるのは夢のようだ。悲しくて私自

身さえも今死ぬかと思われた時が何度となくあつたのだから」

と、院が目には涙を浮かべてお言いになるのを聞くと、夫人も身にしむように思われて、

消え留まるほどやは経^ふべきたまさかに蓮^{はちす}の露のかかるばかりを

と言った。

契りおかんこの世ならでも蓮の葉に玉ゐる露の心隔つな

これは院のお歌である。六条院へはお氣が進まないのであるが、宮

中の聞こえと法皇への御同情から、宮の床についておられる知らせを受けていながら、いっしょに住むほうの妻の大病の気づかしさから訪ねて行くこともあまりしなかったのであるから、女王の病のこんなふうにならずに少しよい間にしばらくあちらの家へ行つていようという心になりになつて院はお出かけになつた。

宮は心の鬼に院の前へ出ておいでになることが恥ずかしく晴れがましくて、ものをお言いになる返辞もよくされないのを長い絶え間にこの子供らしい人もさすがに恨んでいるのであらうと院は心苦しくお思ひになり、慰めることにかかつておいでになつた。お世話役の女房をお呼び出しになり、宮の御不快の経過などを院がお聞きになると、それは妊娠の徴候があつたのことであるという答えをした。

「今になつて全く珍しいことが起こつてきたね」

とだけ院はお言いになつたが、お心の中では長くそばにいる人たちの中にもそうしたことはないのであるから、不祥なことがこちらで起こっているのではないかというような疑いをお覚えになりながら、それをくわしく聞こうとはされないで、ただ悪阻つわりに悩む人の若い可憐かれんな姿に愛を覚えておいでになつた。やつと思ひ立つておいでになつたのであるから、すぐにお歸りになることもできず、二、三日おいでになる間にも、二条の院の女王の容体ばかりがお気づかわれになつて、そのほうへ手紙ばかりを書き送つておいでになつた。

「あんなにもしばらくの間にお言いになる感情がたまるのですかね。宮様をとうとうお氣の毒な方様とお見上げする時が来ましたよ」

などと宮の御過失などは知らぬ人たちが言う。秘密に携わっている小侍従は院の御滞留の間を無事に過ごさうかと胸をとどろかせていた。

えもんのかみ
衛門督は院が六条のほうへ来ておいでになることを聞くと、だいそれた嫉妬しつとを起こして、自己の恋のはげしさをさらに書き送る氣になつて手紙をよこした。院が暫時ざんじ対のほうへ行つておいでになる時で、だれも宮のお居間にいない様子を見て、小侍従はそれを見せしめた。

「いやなものを読めというのね。私はまた気分が悪くなつてきているのに」

こう言つて、宮はそのまま横におなりになつた。

「この端書はしがきがあまりに身にしむ文章なんでございますもの」

小侍従は衛門督の手紙ひろを拡げた。ほかの女房たちが近づいて来たけは氣配いを聞いて、手でお几帳きちようを宮のおそばへ引き寄せて小侍従は去った。

宮のお胸がいつそうとどろいている所へ院までも帰っておいでになつたために、手紙をよくお隠しになる間がなくて、敷き物の下へはさんでお置きになった。二条の院へ今夜になれば行こうと院はお思ひになり、そのことを宮へお言いになるのであつた。

「あなたはたいしたことがないようですから、あちらはまだあまりにたよりないようなのを見捨てておくように思われても、今さらかわいそうですから、また見に行つてやろうと思います。中傷する者があつても、あなたは私を信じておいでなさいよ。また忠実な良人おっとになる日

が必ずありますよ」

これまではこんな時にも、子供めいた冗談じょうだんなどをお言いになって、朗らかにしている方なのであったが、非常にめいっておしまいになり、院のほうへ顔を向けようともしれないのを、内にいだく嫉妬しつとの影がさしているとばかり院はお思いになった。昼の座敷でしばらくお寝入りになったかと思うと、蝸ひぐらしの啼なく声でお目がさめてしまった。

「ではあまり暗くならぬうちに出かけよう」

と言いながら院がお召しかえをしておいでになると、

「『月待ちて』（夕暮れは道たどとし月待ちて云々うんぬん）とも言いますのに」

若々しいふうで宮がこうお言いになるのが憎く思われるはずもな

い。せめて月が出るころまででもいてほしいとお思いになるのかと心苦しくて、院はそのまま仕度したくをおやめになった。

夕露に袖濡そでぬらせとやひぐらしの鳴くを聞きつつ起きて行くらん

幼稚なお心の実感をそのままな歌もおかわいくて、院は膝ひざをおかめになつて、

「苦しい私だ」

と歎息たんそくをあそばされた。

待つ里もいかが聞くらんかたがたに心騒がすひぐらしの声

ちゅうちよ

などと躊躇をあそばしながら、無情だと思われることが心苦しくて
なお一泊してお行きになることにあそばされた。さすがにお心は落ち
着かずに、物思いの起こる御様子で晩饗^{ばんさん}はお取りにならずに菓子だけ
を召し上がった。

まだ朝涼^{あさすず}の間に帰ろうとして院は早くお起きになった。

「昨日の扇をどこかへ失ってしまったて、代わりのこれは風がぬるくて
いけない」

とお言いになりながら、昨日のうたた寝に扇をお置きになった場所
へ行つてごらんになったが、立ち止まって目をお配りになると、敷き
物のある一所の端が少し縊^よれたようになっていた。下から、薄緑の薄様^{うすよう}
の紙に書いた手紙の巻いたのがのぞいていた。何心なく引き出して御

覧になると、それは男の手で書かれたものであった。紙の匂いなどの
艶えんな感じのするもので、骨を折った巧妙な字で書かれてあった。二重
ねにこまごまと書いたのをよく御覧になると、それは紛れもない衛門えもん
督かみの手跡であった。院のお座の所で鏡をあけてお見せしている女房は
御自分の御用の手紙を見ておいでになるものと思つていたが、小侍従
がそれを見た時、手紙が昨日の色であることに気がついた。胸がぶつ
ぶつと鳴り出した。粥かゆなどを召し上がる院のほうを小侍従はもう見る
こともできなかつた。まさかそうではあるまい、そんな運命の悪戯いたづらが
不意に行なわれてよいものか、宮はお隠しになったはずであると小侍
従は努めて思おうとしている。宮は何もお知りにならずになお眠つて
おいでになるのである。こんな物を取り散らしておいて、それを自分

でない他人が発見すればどうなることであろうとお思いになると、その人が軽蔑けいべつされて、これであるから始終自分はあるがぶながつていたのである。あさはかな性格はついに墮落を招くに至ったのであると院は解釈された。

お帰りになったので、女房たちがあらかた宮のお居間から去った時に、小侍従が来て、

「昨日の物はどうなさいました。今朝けさ院が読んでいらつしやいましたお手紙の色がよく似ておりましたが」

と宮へ申し上げた。はっとお思いになって宮はただ涙だけが流れに流れる御様子である。おかawaiiそうではあるがふがない方であると小侍従は見ていた。

「どこへお置きになったのでございますか。あの時だれかが参ったものですから、秘密がありそうに思われますまいと、それほどのことは何でもなかったのですが、よいことをしておりますかと心がとがめまして、私は退^のいて行つたのでございますが、院がお座敷へお帰りになりましたまではちよつと時間があつたのでございますもの、お隠しあそばしたろうと安心をしておりました」

「それはね、私が読んでいた時にはいつていらつしやつたものだから、どこへしまうこともできずに下へはさんでおいたのをそのまま忘れたの」

こう伺つた小侍従は、この場合の気持ちはどう表現すればよいかも知らなかった。そこへ行つて見たが手紙のあるはずもない。

「たいへんでございますね。あちらも非常に恐れておいでになりました。毛筋ほども院のお耳にはいることがあったら申し訳がないと言っておいでになりましたのに、すぐもうこんなことができたではございませんか。全体御幼稚で、男性に対して何の警戒もあそばさなかったものですから、長い年月をかけた恋とは申しながら、こうまで進んだ関係になろうとはあちらも考えておいでにならなかったことでございますよ。だれのためにもお気の毒なことをなさいましたね」

と無遠慮に小侍従は言う。お若い御主人を気安く思つて礼儀なしになつているのであらう。宮はお返辞もあそばさないで泣き入つておいでになつた。御気分がお悪いばかりのようではなく、少しも物を召し上げらないのを見て、

「こんなにもお苦しそうでいらつしやるのに、それを捨ててお置きになつて、もうすっかり快くよなつておいでになる奥様の御介抱を一所懸命になさなければならぬとはね」

と乳母めのとたちは恨めしがった。

院はお歸りになつてから、まだ不審のお晴れにもならぬ今朝の手紙をよく調べて御覧になつた。女房のうちであの中納言に似た字を書く女があるのではないかという疑いさえお持ちになつたのであるが、言葉づかいは明らかに男性であつて、他の者の書くはずのないことが内容になつてもいた。昔からの恋がようやく遂げられたのではあるが、なお苦しい思いに悩み続けていることが、文学的に見ておもしろく書かれてあつて、同情は惹ひくが、こんな関係で書きかわす手紙には人目

に触れた時の用意がかねてなければならぬはずで、露骨にいちもくりようぜん一目瞭然に秘密を人が悟るようなことはすべきでないものをと、院は思いになり、りっぱな男ではあるが、こうした関係の女への手紙の書き方を知らない、落ち散ることも思つて、昔の日の自分はこれに類する場合も文章は簡単にして書き紛らしたものであるが、そこまでの細心な注意はできないものらしいと、衛門督えもんのかみを軽蔑けいべつあそばされるのであつた。それにしても宮を今後どうお扱いすればよいであろうか、妊娠もそうした不純な恋の結果だったのである。情けないことである。人から言われたことでもなく、直接に証拠も見ながら、以前どおりにあの人を愛することは、自分のことながら不可能らしい。一時的の情人として初めから重くなどは思っていない相手さえ、ほかの愛人を持っているこ

とを知つては不愉快でならぬものであるが、これはそうした相手でもない自分の妻である。無礼な男である。お上かみの後宮と恋の過失に陥る者は昔からあつたが、それとこれとは問題が違ふ。宮仕えは男女とも一人の君主にお仕えするのであつて、同輩と見る心から友情が恋となつて不始末を起こす結果も作られるのである。女御によごや更衣こういといつてもよい人格の人ばかりがいるわけではないから、浮き名を流す者はあつても、破綻はたんを見せない間は宮仕えを辞しもせずして、批難すべきことも起こつたであろうが、自分の宮に対する態度は第一の妻としてのみ待遇してきたではないか、心ではより多く愛する人をもさしおいて、最大級の愛撫あいぶを加えていた自分を裏切つておしまいになるようなことと、そんなことは同日に論ずべきでない、これは罪深いこと

ではないかと反感のお起こりになる院でおありになった。侍している君主のほうでもただ一通りの後宮の女性と御覧になるだけで、御愛情に接することもないような不幸な人に、異性の持つ友情が恋愛にも進んでゆけば、あるまじいこととは知りながらも、苦しむ男に一言の慰めくらいは書き送ることになり、相互の間に恋愛が成長してしまう結果を見るような間柄で犯す罪には十分同情してよい点もあるが、自分のことながらも、あの男くらいに比べて思い劣りされるほどの無価値な者でないと思うがと、院は宮を飽き足らずお思いになるのであったが、またこの問題はほかへ知らせてはならぬと思うことで御煩悶はんもんもされた。父帝もこんなふうに自分の犯した罪を知っておいでにならず顔をお作りになったのではなからうか、考えてみれば恐ろしい自

分の過失であつたと、御自身の過去が念頭に浮かんで来た時、恋愛問題で人を批難することは自分にできないのであると思召おぼしめされた。

素知らぬふりはしておいでになるが、物思わしいふうは他からもうかがわれて、夫人は危い命を取りとめた自分をお憐あわれみになる心から、こちらへはお帰りになつたものの、六条院の宮をお思いになると心苦しくてならぬ煩悶かんもんがお起こりになるのであると解釈していた。

「私はもう恢復かいふくしてしまつたのでございますのに、宮様のお加減のお悪い時にお帰りになつてお気の毒でございます」

「そう。少し悪い御様子だけれど、たいしたことでないのだから安心して帰つて来たのですよ。宮中からはたびたび御使みつかいがあつたそうだ。今日もお手紙をいただいたとかいうことです。法皇の特別なお頼

みを受けておられるので、お上もそんなにまで御関心をお持ちになる
のですね。私が冷淡であればあちらへもこちらへも御心配をかけて済
まない」

院が歎息たんそくをされると、

「宮中への御遠慮よりも、宮様御自身が恨めしくお思いになるほうが
あなたの御苦痛でしょう。宮様はそれほどなくてもおそばの者が必
ずいろいろなことを言うでしょうから、私の立場が苦しゅうございま
す」

などと女王にょおうは言う。

「私の愛しているあなたにとって、あちらのことは迷惑千万に違いな
いが、それをあなたは許して、つまらない者の感情をまで思いやって

くれる寛大な愛に比べて、私のはただお上が悪くお思いにならないかという点だけで苦勞をしているのは、あさはかな愛の持ち主というべきですね」

微笑をしてお言い紛らわしになる。

「六条院へはあなたが快くなった時にいつしよに帰ればいいのですよ。宮の御訪問をするのもそれからあとのことです」

そうきめておいでになるように仰せられた。

「私は静かな独棲^{ひとりず}みというものもしてみとうございますから、あちらへおいでになって、宮様のお心のお慰みになりますますまでずっといらつしやい」

夫人からこんな勧めを聞いておいでになるうちに日数がたった。

院のおいでにならぬ間の長いことで今までは院をお恨みにもなった宮でおありになるが、今はその一部を自身の罪がしからしめているのであるということをお知りになって、しまいに法皇のお耳へもはいたなраどう思召すことであろうと、生きておいでになることすらも恐ろしくばかりお思われになるのであつた。お逢いしたいとしきりに衛門督は言ってくるが、小侍従は面倒な事件になりそうなのを恐れて、こんなことがあつたと緑の手紙のことを書いてやった。衛門督は驚いて、いつの間にそうしたことができたのであろう、月日の重なるうちにはいろいろな秘密が外へ洩れるかもしれぬと思うだけでも恐ろしくて、罪を見る目が空にできた気がしていたのに、ましてそれほど確かな証拠が院のお手にはいったということは何たる不幸であらうと恥ず

かしくもつたいなくすまない気がして、朝涼も夕涼もまだ少ないこのごろながらも身に冷たさのしみ渡るもののある気がして、たとえばもない悲しみを感じた。長い歳月の間、まじめな御用の時も、遊びの催しにもお身近の者として離れず侍してきて、だれよりも多く愛顧を賜わった院の、なつかしいお優しさを思うと、無礼な者としてお憎しみを受けることになっては、自分は御前で顔の向けようもない。そうかといって、すっかりお出入りをせぬことになれば人が怪しむことであらうし、院をばさらに御不快にすることになろうと煩悶する衛門督は、健康もそこねてしまい、御所へ出仕もしなかった。大罪の犯人とされるわけではないが、もう自分の一生はこれでだめであるという氣のすることによって、このことを予想しないわけでもなかったではない

かと、あやまった大道に踏み入った最初の自分が恨めしくてならなかった。だいたい御身分相当な奥深い感じなどの見いだせなかった最初の御簾みすの隙間すきまも、しかるべきことではない。大将も軽々しいと思つたことはあの時の表情にも見えたなどと、こんなことも今さら思い合わせたりした。しいてその人から離れたいと願う心から欠点を捜すのかもしれない。どんなに貴人といつても、おおようと、気持ちの柔らかい一方な人は世間のこともわからず、侍女というものに警戒をしなければならぬこともお知りにならないで、取り返しのつかぬあやまちを御自身のためにも作り、人にも罪を犯させる結果になつたと思ひ、衛門督の心は、宮のお気の毒なことを思いやって堪えがたい苦悶くもんをするのであつた。

宮が可憐な姿で悪阻に悩んでおいでになるのが院のお目に浮かんで、心苦しく哀れにお思われになった。良人としての愛は消えたように思っておいでになっても、恨めしいのと並行して恋しさもおさえがたくおなりになり、六条院へおいでになった。お顔を御覧になると胸苦しくばかりおなりになる院でおありになった。祈祷を寺々へ命じてさせてもおいでになるのである。表面のお扱いでは以前と何も変わっていない。かえって御優遇をあそばされるようにも見えるのであるが、夫婦としてお親しみになることはそれ以来断えてしまった。人目を紛らすために御同室にお寝みになりながら、院がお一人で煩悶をしておいでになるのを御覧になる宮のお心は苦しかった。秘密を知ったともお言いにならぬ院でおありになったが、女宮は御自身で罪人らし

く萎縮^{いしゆく}しておいでになるのも幼稚な御態度である。こんなふうの人であるから不祥事も起こったのであろう。貴女らしいとはいってもあまりに柔らかな性質は頼もしくないものであるとお考えになると、いろいろの人の上がお気がかりになった。女御^{にょご}があまりに柔軟な様子であることは、この宮における衛門督のような恋をする男があるとすれば、その目に触れた以上精神を取り乱して大過失を引き起こすに至るかもしれない、女性のこうした柔らかい一方である人は、輕侮してよいという心を異性に呼ぶのか、刹那^{せつな}的に不良な行為をさせてしまうものであると、院はこんなこともお思いになった。右大臣夫人がそれという世話を受ける人もなくて、幼年時代から苦勞をしながら才も見識もあつて、自分なども義父らしくはしながらも、恋人に擬しておさえが

たい情念を内に包んでいたのを、かどだたず気がつかぬふうに退け続けて、右大臣が軽佻な女房の手引きでしいて結婚を遂げた時にも、自身は単なる受難者であることを、それ以後の態度で明らかにして、親や身内の意志で成立した夫婦の形を作らせたことなどは、今思つてもきわめてりっぱなことであつたと、玉鬘のこともこのふがいない人に比べてお思われになつた。深い宿縁があつて夫婦になつた人であるから、離婚をしようとは考えないが、品行問題で世評の立つことになれば、それにしたがつて知らず知らず多少の侮蔑を自分は加えることになるであらう。あまりにも実質に伴わない尊敬をしてきたと、以前からのことを思つてもごらんになつた。

院は二条の朧月夜のおぼろづきよの尚侍になお心を惹かれておいでになるのであつ

たが、女三によさんの宮みやの事件によつて、後ろ暗い行動はすべきでないという教訓を得たようにお思いになつて、その人の弱さにさえ反感に似たようなものをお覚えになつた。尚侍が以前から希望していたとおりに尼になつたことをお聞きになつた時には、さすがに残念な氣がされてすぐに手紙をお書きになつた。その場合に臨んで、されてよい予報のなかつたことをお恨みになる言葉がつづられてあつた。

あまの世をよそに聞かめや須磨すまの浦に藻塩もしほた垂れしもたれならなく
に

人世の無常さを味わい尽くしながらも、今日まで出家を實行しえな

い私を、あなたはどんなに冷淡になつておいでになつてもさすがに
回向えこうの人数の中にはお入れくださるであらうと、頼みにされるところ
もあります。

などという長いお文ふみであつた。早くからの志であつたが、六条院が
お引きとめになるために、それでない表面の理由は別として、尚侍は
尼になるのを躊躇ちゆうちよするところがあつたのでさえあるから、このお手紙
を見て青春時代から今日までの二人のつながりの深さも今さらに思わ
れて身にしむ尚侍であつた。返事はもう今後書きかわすことのない終
わりのものとして心をこめて書いた尚侍の手跡が美しかった。

無常は私だけが体験から知つたものと思つておりましたが、しおく
れたと仰せになりますことで、こんなにも思われます。

あま船にいかがは思ひおくれけん明石^{あかし}の浦にいさりせし君

回向^{えこう}には、この世のすぐれた方として決してあなた様を洩^もらしはい
たしません。

これが内容である。濃い鈍色^{にび}の紙に書かれて、櫛^{しきみ}の枝につけてある
のは、そうした人のだれもすることであつても、達筆で書かれた字に
今も十分のおもしろみがあつた。この日は二条の院においでになつた
ので、夫人にも、もう実際の恋愛などは遠く終わった相手のことで
あつたから、院はお見せになつた。

「こんなふうに侮辱されたのが残念だ。どんな目にあつても平気なよ
うに思われて恥ずかしい。恋愛的な交際ではなしに、友人として同程

度の趣味を解する人で、仲よくできる異性はこの人と齋院だけが私に残されていたのだが、今はもう尼になってしまわれた。ことに齋院などは尼僧の勤めをする一方の人になっておしまいになった。多くの女性を見てきているが、高い見識をお持ちになって、しかもなつかしい匂いの備わっているような点であの方に及ぶ人はなかった。女を教育するのはむずかしいものですよ。夫婦になる宿命というものは、目に見えないもので、親の力でどうしようもないものだから、結婚するまでの女の子の教育に親は十分力を尽くすべきだと思う。私は娘を一人しか持たなくてその責任の少ないのがうれしい。まだ若くて人生のよくわからなかったころは、子の少ないことが寂しく思われもしたものですがね。まあ孫の内親王をよくお育てしておあげなさい。女御はま

だ大人になりきらないで宮廷へはいってしまっただから、すべてがいまだに不完全なものだろうと思われる。姫宮の教育は最高の女性を作り上げる覚悟で、微瑕びかもない方にして、一生を御独身でお暮らしになってもあぶなげのない素養をつけたいものですね。結婚をすることになっている普通の家の娘はまた良人おとこさえりっぱであれば、それに助けられてゆくこともできますがね」

などと院がお言いになると、

「りっぱなお世話はできませんでも、生きています間は姫宮のおためになりたい心でございますが、健康がこんなのではね」

と答えて夫人は心細いふうにわが身を思い、自由に信仰生活へはいることのできた人々をうらやましく思った。

「尚侍の所は尼装束などもまだよくととのつていないことだろうか
ら、早く私から贈りたいと思うが、袈裟けさなどというものはどんなふう
にしてこしらせるものだろう。あなたがだれかに命じて縫わせてくだ
さい。一そろいは六条の東の人にしてもらいましょう。あまりに法服
らしくなつては見た感じもいやだろうから、その点を考慮して作るの
ですね」

と院はお言いになつた。青鈍色あおにびの一そろいを夫人は新尼君のために
手もとで作らせた。院は御所付きの工匠をお呼び寄せになつて、尼用
の手道具の製作を命じたりしておいでになつた。座蒲団ざぶたん、上敷うわしき、屏
風うぶ、几帳きちようなどのこともすぐれた品々の用意をさせておいでになつた。

紫夫人の大病のために法皇の賀宴も延びて秋ということになつてい

たが、八月は左大将の忌月きづきで音楽のほうをこの人が受け持つのに不便だと思われたし、九月はまた院の太后のお崩れかくになった月で、それもだめ、十月にはと六条院は思っておいでになったが、女三によさんの宮みやの御健康がすぐれないためにまた延びた。衛門督えもんのかみの夫人になっておいでになる宮はその月に参入された。舅しゅうとの太政大臣が力を入れて豪華ごうしゃな賀宴がささげられたのである。病気で引きこもっていた衛門督もその時はじめて外出をしたのであった。しかもそのあとはまた以前にかえって、病床に親しむ督であった。女三の宮も御煩悶はんもんばかりをあそばされるせいか、月が重なるにつれてますますお身体からだがお苦しいふうに見えた。院は恨めしいお気持ちはあっても、可憐かれんな姿をして病んでおいでになる宮を御覧みになつては、どうなるのであらうと不安を覚えてお歎なげきに

なることが多かった。祈禱^{きとう}をおさせになることで御多忙でもあった。法皇も宮の御妊娠のことをお聞きになって、かわいく想像をあそばされ、逢^あいたく思召^{おぼしめ}された。長く六条院は二条の院のほうに別れておいでになって、お訪^{たず}ねになることもまれまれであると申し上げた人も以前あったことによつて、御妊娠がただ事の結果でなくはないのであるまいかとふとこんなことを思召すとお胸が鳴るのもあった。人生のことが今さら皆お恨めしくて、紫夫人の病気のころは院があちらにばかり行つておいでになったのを、もつともなこととはいえ、思いやりのないこととして聞いておいでになったが、夫人の病後も院の御訪問はまれになったというのは、その間に不祥なことが起こつたのであるまいか。宮が自発的に墮落の傾向をおとりになつたのではなく、軽

薄な女房の仕業しわざなどで不快な事件があつたのではなからうか、宮廷における男女の間は清潔な交際で終始しなければならないものであるのに、その中にさえ醜聞を作る者があるのであるからと、こんなことまでも御想像あそばされるのは、いっさいをお捨てになつた御心境にもなお御子をお思いになる愛情だけは影を残しているからである。法皇が愛のこもつたお手紙を宮へお書きになつたのを、六条院も来ておいでになる時で拝見されたのであつた。

用事もないものですから無沙汰ぶさたをしているうちに月日がたつということもこの世の悲しみです。あなたが普通でない身体からだになつて健康もそこねているということをくわしく聞きましたが、今はどうですか。世の中が寂しくなるような運命に出あつても、忍んでお暮らし

なさい。恨めしがる様子をお見せになったり、妬^{ねた}みを告げたりすることは上品なものではありません。

などと訓^{さと}しておありになるのである。院はお氣の毒で、心苦しくて、宮に秘密のあることなどはお知りあそばされずに、自分の不誠意とばかり解釈しておいでのなるのであらうとお思いになって、

「お返事はどうお書きになりますか。心苦しいお手紙で私はつらい気がしますよ。あなたにどんなことがあっても、人に変わった様子は見せまいと私は努めているのですよ。だれがいろいろなことを申し上げたのだらう」

とお言いになると、恥じて顔をおそむけになる宮のお姿が可憐^{かれん}であつた。顔がすっかり瘦^やせて物思いに疲れておいでのなるのが上品に

美しい。

「あなたの幼稚な性質を知っておいでになって、こんなにもお言いになるのだと、私は他のことと思ひ合わせてごもつともだと思われる点がありますよ。それで今後も危^{あぶ}なかく思われてならない。こんなふうに言つてしまおうとは思ひなかつたことですが、院が私を頼みがいなく思召すだろうと思うことが苦痛ですからね。あなただけにでも私が輕薄な者でないことを認めてほしいと思うのですよ。深く物をお考えにならないで、人のいいかげんな言葉にお動きになるあなたには、私のほんとうの愛が浅いものに見えもするでしょうし、またあなたとは年^{とし}齡の差のはなはだしい良人^{おとと}を輕蔑^{けいべつ}したくもなるでしょうけれど、私としてそれを残念に思わないわけはありませんが、院の御在世中だ

けは、これを幸福な道としてお選びになったことですから、老いた良人をもあまり無視するようなことはお慎みになるがいいのですよ。昔から願っている出家の志望も、自分よりは幼稚な宗教心しか持つまいと思っていた女の人たちが先に実行するのを傍観しているのも、私自身がこの世の欲を捨てえないのではなくて、出家をあそばす際にはあなたをお託しになった院のお志に感激した心が、すぐまた続いてあなたを捨てて行くような行動を取らせなかったのですよ。以前は気がかりに思われた人も今ではもう出家の絆ほだしにならないだけになっているのです。女御だっただうなるか知りませんが、皇子たちがお殖ふえにもなつてゆくのですから、後宮の地位などは問題にさえせねば苦勞のない立場を得られることだけはできると私も見ておけます。そのほかの

人たちは成り行きのままで、私といっしょに出家をしてしまってももういいほどの年齢としになつていてこのごろでは思われます。院ももう長くはおいでにならないでしょう。以前よりいっそうお身体からだが弱くおなりになつて、心細い御様子でいらつしやるこのことですから、今になつて悪い名などをお耳に入れて御心配をかけてはいけませんよ。この世は何でもありませんが、来世のお妨げになることをしてはあなたの罪も大きくなりますよ」

そのことと露骨にお言ひにならないのであるが、しみじみとお説きになるために、宮は涙ばかりがこぼれて、知らず知らずめいり込んでおしまいになつたのを御覧になる院も、お泣きになつて、

「他の人がこうしたことを言うのを、聞く必要もない老人としよりの理窟りくつだと

思つた私だが、いつのまにかそれを言うほうの人に私がついている。
よけいなことを言う老人だと思ひになつていつそいいやになるで
しょう」

ともお言いになつて、硯すずりを引き寄せて御自身で墨をおすりになり、
紙をお選よりになりなどして、お返事を書かせようとされるのである
が、宮は手も慄ふるえてお書きになれない。あの濃厚な言葉の盛られて
あつた衛門督えもんのかみの手紙の返事はこんなに洩はらずに書かれたであろうとお
思ひになると、また反感が起こるのでもおありになつたが、それでも
院は言葉などを口授くじゆしてお書かせになつた。

「お伺いになることはこんなことで今月もだめでしたね。それに新婚
者の女にょに二の宮みやが派手はでな御賀をおささげになつた時に、老人の妻である

あなたが競争的に出て行くのは遠慮すべきだと思いましたよ。十一月はあなたのお母様の忌月でしょう。十二月はあまりに押しつまってよろしくないし、あなたの身体からだも見苦しくなるだろうから、久しぶりにお姿を御覧に入れるのはいかがかと思います。しかしそうそう延ばしてよいことでありませんからね、あまり物思いをしないようにして、朗らかな心になって、瘦やせたお顔のなおるようにまずなさい」

などとお言いになって、さすがにかわいくは思召すのであった。

衛門督をどんな催し事にも必要な人物としてお招きになって御相談相手に今まではあそばす院でおありになったが、今度の法皇の賀に限って何の仰せもない。人が不審がるであろうとはお思いになるのであるが、その人が来てはずかしめられた老人である自分の見られるこ

とも不快であるし、自分が彼を見ては平静で心がありえなくなるかもしれぬと院は思いになって、もう幾月も参殿しない人を、なぜかとお尋ねになることもないのである。ただの人たちは衛門督が病氣続きであつたし、六条院にもまた音楽その他のお催しの全くない年であるからと解釈していたが、左大將だけは何か理由のあることに違いない、多感多情な男であるから、自分が推測していたあの恋で自制の力を失うようなことがあつたのではないかとはい見えても、まだこれほど不祥なことが暴露してしまつたとは想像しなかつた。

十二月になつた。十幾日と法皇の御賀の日が定められて六条院の中は用意に忙しくなつた。二条の院の夫人はまだそのまま歸らずにいたが、御賀の試楽があるのに興味を覚えてもどつてきた。女御も実家にによご

いた。今度のお産でお生まれになったのもまた男宮であつた。次々に皆かわいい宮様を夫人はお世話することに生きがいを感じていた。試樂の日は右大臣夫人も六条院へ来た。左大將は東北の御殿でそれ以前にすでに毎日監督する舞曲の練習をさせていたから、花散里夫人は試樂の見物には出て来なかつた。衛門督えもんのかみをこの試樂の日に除外するのは惜しく物足らぬことであると院はお思ひになつたし、それ以上にまた人の不審を引くことをお恐れにもなつて、来るようにと使いをお向けになつたが、病の重いことを申して督は出て来ようとしなかつた。病氣といつても何という名のある病をしているのでもないわけであるが、やましく思う点があるのであらうと、心苦しく思召して、特使をさえもおやりになつて招こうとあそばされた。父の大臣も、

「なぜ御辞退をしたかね。何か含むことでもあるように院が御思いになるだろうに。大病というのではないのだから、無理をしても参ったほうがよい」

と勧めていたところへ再度のお使いが来たのであつたから、つらい気持ちをいだきながら参つた。それはまだ他の高官などの集まつて来ない時分であつた。これまでのようにお座敷の御簾みすの中へ衛門督をお入れになつて、院御自身はまた一つの御簾を隔てた奥のお居間においてになつた。噂うわさのとおり非常に痩せて顔色が悪かつた。平生もはなやかな派手はでな美しさは弟たちのほうに多くて、この人は深く落ち着いた静かな風采ふうさいによさのあつた人であるが、今日はことにおとなしい身のとりなしで侍している姿を、内親王の配偶者として見ても相応らし

い男であるが、その関係の正しくないのが不快だ、憎悪ぞうおを覚えずにはおられないのであると院は思召したが、さりげなくしておいでになった。

「機会がなくてあなたにも長く逢あいませんでしたね。長く病人の介抱をしていて何の余裕もなくてね、前からここへ来ておいでになる宮が、院の賀に法事をして差し上げたいと言っておられたのが、いろいろな故障で滞とどまっていたね、今年も暮れになったので、これ以上延ばすこともできず、以前に計画したとおりのことはとのわないが、形だけでも精進のお祝い膳ぜんを差し上げる運びになって、賀宴などというのたいそうだが、親戚しんせきの子供たちの数がたくさんにもなっているのだから、それだけでも御覧に入れようと思って舞の稽古けいこなどをさせ始めた

ものだから、せめてそれだけでもうまくゆくように思つて、拍子が合うか試してみるのですが、指導をしていたくのに、だれがよいかともよく考える間がなくてあなたに御面倒を見てもらうのがよいときめて、長くおいでもなかったお恨みも捨てたわけですよ」

とお言いになる院の御様子に、昔と変わった所もないのであるが、衛門督は羞恥しゆうちを感じて自身ながらも顔色が変わっている気がして、急にお返辞ができないのであつた。

「長らく奥様がたが御病氣をしておいでになりますことを承っておりまして、御心配を申し上げながら、前からございました脚かっけ気がしきりに出てまいりまして、歩行が困難でございましたために御所へ上がる事ができませんで、すっかり世の中から隔離されましたような寂し

い生活をいたしておりました。院がおめでたい年に達せられますので、こうぎ年来の御交誼こうぎに対してまずお祝いを申し上げなければと父が申し
ておりましたが、関白を拝辞しました自分が表だつて出ることより
も、地位は低くとも中納言の私が主催するのが妥当であると父は考
えるようになりまして、私の誠意をお目にかくべきだと勧められまし
たものですから、病体をおしてあちらへはお伺いいたしましたのでござい
ます。いよいよお寂しい静かな御生活のように拝見いたしましたあちら
の御様子では、はなやかな賀宴をお持ち込みあそばすようなことは恐
縮なされるだけではないかと拝察されまして、こちら様の御質素な御
計画はかえつて御満足になることかと存ぜられます」

と衛門督えもんのかみが申すと、華奢かしやを尽くしてお目にかけたという前日の賀宴

を女二の宮の関係でしたとは言わずに、父のためにしたと話すのに心の鍛錬のできていることがわかれると院は思召された。

「私の所でやらせていただくことはこのとおりに簡単なことであるのを見て、一概に悪く言う人もあるであろうと思っていたが、理解のあるお言葉を聞いて、さすがにとあなたにはいよいよ敬意が払われる。

大將は役人としては少しは経験ができたようでも、そうした繊細な觀察をすることなどは、得意でもないだろうがいっこうだめですよ。法

皇はあらゆる芸術に通じておいでになるが、その中でも最も音楽の御造詣ぞうけいが深いから、それらに遠ざかっておいでになる御出家後といえども院が御覧になるのだと思うと晴れがましいのですよ。あの大將といっしょに、舞い手になる子供へ、心得べきことをよく注意しておい

てくれたまえ。専門家の師匠というものは自身の芸には偉くても融通のきかないものだから」

などとお命じになるなつかしい味のある院の御様子をうれしく拝しながらもまた衛門督は恥ずかしく、きまり悪く思われて、言葉少なに
していて少しも早く御前を立つて行きたいと願われる心から、以前の
ように細かい話しぶりは見せずにいるうち、ようやく願いどおりにこ
こを去るによい時を見つけた。東北の御殿で大将が掛^かりになって十分
に用意してあった舞い手と楽人の衣装などが、また衛門督の意見に
よって加えられるものもできた、その道には深く通じている衛門督で
あったから。今日は試楽の日なのであるが、これだけを見物するのに
とどまる夫人たちも多いため、目美しくして見せるのに、賀の当日の

舞い人の衣装は、明るい白椽しろつるばみに紅紫したかさねの下襲しもがさねを着るはずであつたが、今日は青い色を上えんじに臙脂えんじを重ねさせた。今日の楽人三十人は白襲しろがさねであつた。南東の釣殿つりどのへ続いた廊の室へやを奏楽室にして、山の南のほうから舞い人が前庭へ現われて来る間は「仙遊霞せんゆうか」という楽が奏されていた。ちらちらと雪が降って、もう隣へ近づいた春を見せて梅の微笑ほほえむ枝が見える林泉の趣は感じのよいものであつた。

縁側に近い御簾みすの中に院のお席があつて、そこにはただ式部卿しきぶきょうの宮が御同席され、右大臣の陪覧する座があつただけである。以下の高官たちは皆縁側に席をして、そこには形式を省いた饗応きようおうの物が出されてあつた。右大臣の四男と、左大将の三男、それに兵部卿ひょうぶきょうの宮の御幼年の王子お二人の四人立ちで万歳楽が舞われるのであるが、皆小さい姿

でかわいかった。四人とも皆高い貴族の子供たちで風貌ふうぼうが凡庸でない。皆にいたわれながら小公子たちは登場した。また大将の典侍腹てんじばらの二男と、式部卿の宮の御長男でもとは兵衛督であって今は源中納言となっている人の子のこの二人が「皇※こうじよう」、右大臣の三男が「陵王りようおう」、大将の長男の「落蹲らくそん」のほかにも「太平楽」「喜春楽」などの舞曲も若い公達きんだちが演じた。日が暮れてしまうと御前の御簾は巻き上げられて、音楽にも舞にもおもしろみが加わってゆく。かわいい姿の御孫の公達は秘伝を惜しまずそれぞれの師匠が教えた芸に、よい遺伝からの才気の加味された舞をだれもおもしろく見せるのを、皆かわいく院は思召おぼしめした。老いた高官たちは皆落涙をしていた。式部卿の宮も御孫の芸にお鼻の色も変わるほど感動されたのであった。六条院が、

「年のゆくにしたがつて酔い泣きをするのがますます烈はげしくなつてゆく。衛門督えもんのかみのおかしそうに笑つておられるのが恥ずかしい。歲月はさかさまに進むものではないからね。あなたがたでも老いのがれられないですよ」

と言つてその人の顔を御覧になる。だれよりもまじめに堅くなつていて、偽りでなく身体からだの具合も悪く思われ、おもしろいことも目にとまらぬ気持ちになつている衛門督を、お名ざしになり、酔態に託してこう仰せられるのは戯れらしくはあつたが、その人ははつと胸がとどろいて、めぐつて来た杯は手に取つてもただ少ししか飲まないのを、院は見とがめになつて、御座からたびたび侍者に酒を持たせておつかわしになり、おしいになるのを、困りながら辞退する取りなしなど

も、平凡な人とは見えず感じよく院はお思いになった。身心の苦痛に堪えられなくなつて衛門督はまだ宴の終わらぬうちに辞して歸つたが、悪酔いからさめることのできないのは、院を^ま目のあたり見て罪の自責に苦しんだために逆上したのであろうが、それほど^{おくびよう}臆病な自分ではなかつたはずであるがと悲しんだ。一時的な酒精の毒ではなくてそのまま衛門督は寝ついて重い容体になつた。衛門督の父母がよそに置いてあるのが不安になり、自邸へつれもどすことにしたのを、夫人の宮の悲しがつておいでになるのがまた衛門督には苦しく思われた。何事もなかつた間は、衛門督自身も、宮をお愛する情熱のありなしすら忘れてゐるほどの良人であつたが、もうこの世での別れかもしれぬと予感される今日の心には、宮をお残しして行くことが悲しくて、未

亡人の寂しい人におさせするのが堪えられない苦痛に思われ、またもったいなくも思われ歎なげかれるのであった。宮の御母の御息所みやすどころも非常に悲しんだ。

「世間の慣ならいでは親は親として、御夫婦というものはどんな時にもごいっしょにおいでになることになっています。あちらへ移っておしまいになって、御回復なさるまで別々においでになるのは、宮様のためにおかわいそうなことですから、せめてもうしばらくの間こちらで養生をなさませ」

この人が病床との隔てに几帳きちょうだけを置いて看護をしているのである。

「ごもつともです。私ごとき者と結婚をしてくださいました宮様のた

めには、せめて私が長生きをして相当な地位を得るように努力せねばならぬと心がけてはいたのですが、こんな病人になつてしまひましては、私の愛がどれほどのものであつたかを宮様にわかつていただけないで終わるかと思ひますことで、もう命の助からぬような氣のしますうちでも、死なれぬ氣がするのです」

などと泣き合つていて、迎えようとするのに、すぐに移つても来ないのを母の夫人は氣づかわしがつて、

「そんな場合に、どうして親の所へ来ようとあなたは思つてくれないのだらう。私が病氣をする時には、おおぜいの子供の中でも特にあなたがそばにいてほしく、またいてくれれば頼もしくてうれしいのだのに、いつまでもなぜそちらにあなたはいる」

こんなことを使いに言わせて来るのにももつともなところがあった、衛門督^{えもんのかみ}は母へ同情をせずにはおられないのであった。

「私がいちばん初めに生まれたためなのでしょうが、大事にされていまして、こんなになってもまだ母はかわいがりまして、しばらくの間でも逢^あわずにいることを苦しがるのですから、もう頼み少ない病状になつてゐる際に、母の逢いたがる心を満足させないのは未来の世までの罪になるだろうと思われますから、とにかく病床をあちらへ移します。もういよいよ危篤になつたというしらせがありましたら、そつと大臣邸へおいでなさい。必ずもう一度お目にかかりましょう。ぼんやりとした性質なものですから、氣もつかずにあなたを不愉快におさせしたような場合もあつたであらうと思われますのが残念でなりませ

ん。こんなに短命で終わろうとは思いませんで、長い将来に誠意をくんでいただける日が必ずあるもののように思つて安心していました」

と、衛門督は宮に申して、泣く泣く父の家へ移つて行つた。宮はあとに思いこがれておいでになつた。大臣家では病人の扱いに大騒ぎをして、きとつ祈祷やその他に全力を尽くすのであつた。病は最悪という容態でもない。ただ食慾がひどく減退して、もうこちらへ来てからは果物くだものをさえ取ろうとしなかつた。教養の足りた優秀な高官と見られている人が、こんなふうに頼み少ない容体になつていることを世間は惜しんで、見舞いを申し入れに來ぬ人もない。宮中からも法皇の御所からもしばしばお見舞いの御使みつかいが來て、衛門督の病状を御心痛あそばされているのを見ても、両親は悲しくばかり思われた。六条院も非常に残

念に思召おぼしめして、たびたび懇切なお見舞いの手紙を大臣へ下された。左
大將はまして仲のよい友人であつたから、病床へもよく訪ねたずて来て、
衛門督をいたましがつていた。

法皇の御賀は二十五日になつた。現在での花形の高官が重い病氣を
してその一家一族の人たちが愁うれいに沈んでいる時に決行されるのは寂
しいことのように院は思いになつたが、月々に支障があつて延びて
きたことであつたし、ぜひ今年じゅうにせねばならぬことでもあつた
から、やむをえぬことだったのである。院は姫宮の心情を哀れにお思
いになっていた。かねての計画のように五十か寺での御誦経ずきようが最初
にあつて、法皇のおいであそばされる寺でも大日如来だいにちによらいの御祈りが行な
われた。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
